

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

新発見の『逸見(へみ)古歌抄』とその周辺の研究：
千百餘年間不明だった和風軍歌

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1976-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/617

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



新発『逸見古歌抄』とその周辺の研究

— 千百餘年間不明だった和風軍歌 —

小池 藤五郎

目次

	(頁)
一 歌謡とその研究への魅力	一
二 歌謡は生きた社会史	四
三 メロディの底に潜む各藩の利害	五
四 幕兵調練用の「トンヤレ歌」	七
五 『松平幕末史料』中の「紙張れ節」	八
六 「トンヤレ唄」その他の精密調査	八
七 協同作詞説と和風軍歌の出現	九
八 和風軍歌から洋風軍歌、さらに現在の軍歌へ	一〇
九 和風軍歌というべき物	一二
一〇 日本の武士は啞だったのか	一三
一一 『閑吟集』と『隆達小唄』	一四
一二 『万葉集』中で軍歌風の物	一五
一三 『古事記』を一瞥する	一六
一四 手近に軍歌史料が潜んでいた	一七
一五 「逸見・武川国学集団」から「見返り塚」	一九
一六 甲斐国の「剛風英俗」と新府城	二二
一七 「逸見・武川国学集団」中の女性	二五
一八 波先の「さだ女」と油谷倭文子	二六
一九 賀茂真淵に就ての新発見	二八
二〇 真淵の誓詞と集団の誓詞	二九
二一 『甲斐国志』の編纂と歌謡	三〇
二二 『逸見古歌抄』中の素朴な歌	三二
二三 逸を以て勞を待つ戦法と歌	三三
二四 自害沢・恵林寺と悲歌	三四
二五 柳沢吉保関係の「エグエグ節」	三七
二六 甲斐性（剛風英俗）による武田武士の大復讐	三九
二七 歴史の謎と家康の視線	四一
二八 日義大徳の歌とそれに続くもの	四三

二九 新軍歌斉唱の明治天皇御製

三〇 めぐりあはせ

三一 摘要

一 歌謡とその研究への魅力

甲府の東に隣接し、善光寺・東光寺・能成寺・酒折の宮・夢山をふくむ秀麗な境。茶道越で、武田信玄の居館の古城に通ずる巨大な半円形の土地——東・西・北の三方を山で囲まれた盆地——この里垣村山地（当時は村のアザ）の筆者の住家は、先祖代々住みなれた更科村岩下の「阿礼村」（家名）から転居して来た家で、私はここから県立甲府中学校へ通った。この地域を「私は歌の盆地」とよび、私の人間形成には、強く影響した思い出の場所である。

村の青年たちは、甲府の町への行き帰り、又、村内を遊び歩く折に、特に夜は、大声で色々の歌謡を歌うのが習慣であった。明治・大正の流行歌の様々、詩吟・薩摩琵琶・浄瑠璃・浪花節・軍歌などと、さまざまである。

歌ずきの中学生だった筆者も、「嗚呼玉杯に花うけて」の一高寮歌などから、熱愛していた歌集の『万葉集』中の山部赤人の「不尽山を望める歌」（座田空穂の『万葉集選』による）や、柿本人麿の「高市皇子尊の城の上の殯宮の時に」の歌、自作の詩の朗読、甲斐国の古い流行歌などと、常に歌を口にしていた。

夕食後には、田圃の細道、葡萄棚の間の草道、稲田のあぜ道を散歩し

四三

四四

四五

たり、或は夢山の頂上に近い一本松のあたりまで登り、声を限りに歌った。下級生の滝沢善次郎を供とし、校歌を合唱しつつ気持よく歩きもした。東の鏡台山から北の帶那高原へ続く山の屏風で、声の効率がとても良く、巨大な自然の大風呂にひたつての風呂浄瑠璃めいた感じもし、若さを発散させるには、この上もない行動であった。

当時の校歌集で、若人の人気を集めていた『校歌ロマンス』は、『万葉集選』と共に、いつも手にしていた。一方、校歌を歌詞として検討する事にも興味があった。『万葉集選』の歌の七〇〇首ぐらいを暗記し、それを散歩の道々、百首ぐらいづつ、ゆっくりと朗詠を繰返した。これは暗記力の鍛練ともなつて、今も心に残っている。

秋の月が鏡台山に登り、酒折宮の森が黒ずむと、私は歩き出し、歌い出し、ついに足は、宮の広前までのびる。本居宣長の「酒折宮寿詞」という文章を刻んだ寛政三年（一七九一）の碑の前で、宣長の歌を、語りつぐ 御歌と共に 万代に つぎて栄えん 酒折の宮と、くり返して朗吟をもした。

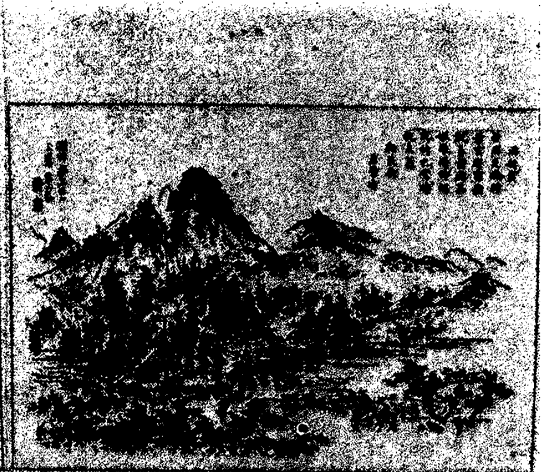
この歌の中の「語りつぐ御歌」の言葉こそは、日本武尊の「珥比麼利」の歌をさすのである。この「珥比麼利」を口ずさむと、神慮も慰められるものか、松風の音は、神の御心さながらに、澄んで響いた。

『日本書紀』（景行天皇十年庚戌）には、日本武尊が、甲斐国に入り、酒折宮に着かれた時、灯火のもとで、食事をとられた。この時に尊は、侍臣に向い、尊のうたう歌の意味で、一種の公式的の質問をされた。

○珥比麼利 菟玖波塙須擬氏 異玖用加禰菟流。



日本武尊と拳燭者が歌い合う図



酒折宮（左方の松林の中・後方が鏡台山）

が質問の歌である。

しかしそれに答える者がなかった。すると拳燭者が、尊と同じように、歌で答えた。その歌は、

○伽餓奈倍氏 用珥
波處處能用 比珥波苦
塙伽塙

であった。若かった私は、尊になり、拳燭者となったつもりで、楽しく朗詠した。

このような事々が、和歌・興（狂）歌・詩・俳句を私が楽しみ、小・中・高校・大学などの校歌を作詞し、歌謡研究を続ける基礎的な、爽やかな感情となっている。

さらに、明治元年生

まれの父が歌好きで、その影響も大きい。父は一杯の酒で上機嫌になり、甲斐国の古歌謡や、明治初年の流行歌、明治一五年代の軍歌などを、よく歌った。また家蔵の阿礼村文庫中の、古い史料中には、先祖が手記した甲斐国古歌謡、盆踊歌などの記録があった。それらには、私が生れた村である岩下村（明治になって更科村と村名を変更）の氏神様や寺、代々の名主の小池家などを歌った、何篇もの歌もある。父は村人と共々、常にそれを口にし、幼い私もそれを真似て口にしていた。

○岩下村が 流れど焼けどネ 助けたいのは 助けたいのは 藤五郎
（伝右衛門・藤九郎）さんの質蔵。

これらは嘉永・安政（一八四八―一八五九）頃の盆踊歌で、「藤五郎さんの質蔵」とも、「阿礼さん」・「伝右衛門さん」・「藤九郎さん」とも、その時代の当主の名を入れかえ、家名の「阿礼さん」を入れなどして、長い年代に渡って歌われた。この藤五郎は明治までの名主役の藤五郎胤章のことである。甲府御城代（勤番支配）の免許をうけて、当時の銀行とも言える質屋を、名主役で兼業していた。村人は入質してある質物の無事を常にいのって居り、庶民のありのままの心持の歌である。事実、塩川溪谷の岩下村には洪水の被害が大きく、また溪谷の空っ風で、火災も少なくはなかった。歌には、その地域の生活がにじみ出している。

○阿礼村さんの椿は ケツよりでっかいネ 勝手の御神木カア 三畳敷（「あれえの椿は」）とも歌う）

大男の尻まわりより太く、五〇〇年の樹齢の椿が、屋敷神のホコラの上に、大きく枝をひろげてい、村人はそれを盆踊歌に歌ったのだ。

二 歌謡は生きた社会史

八嶽・金峯山・瑞垣山・茅岳等に源を発する塩川の広い溪谷と、甲斐の駒嶽に発源する釜無川の谷とが、相合する所が私の生れた村である。二川は合して、甲府盆地に向い、大きく谷の口を開く。上流の山々の濫伐の結果、特に徳川時代には、年々に洪水が続ぎ、美田は巨石の横たわる河原となり、村人はひどく難渋した。甲斐国は幕府の直轄地ゆえに、甲府城代から「お救い普請」の恩恵があった。村の統轄者の名主が責任者となり、小前の百姓たちを人足につかい、堤防を築き、村内へ流れこんだ鉄砲水を遮断するのである。美田は流され、村は疲弊し、稲の収穫はなく、茅岳の広大な裾野の畑で育つ粟を、主食とする外はなかった。村民は、甲州第一等の品質の自作米（当時も現在も寿司米として用いられている）を食いつけていたので、泣き声で歌うのであった。

○粟ボッソウじゃア 尻が出るばッカリヨ 腰がよじくれ くッチャ
グ目玉ヨ 名主どん頼んだ 銭ヨウ早ヨウ

粟ばかりで、米が少しもはいらない「粟ボッソウ飯」を毎日食っているのじゃア、尻が出るばッカリで、体がもたない。現に腰がヨジれて、重い物は担げない。栄養不良のために、目も開いていられず、自然につぶるようになって困る。名主どん頼みますよ、甲府の御役所からの川普請の賃金を、早く小前に分けておくんせエ。その銭で米を買い、粟にまぜて炊いて食はにゃア、体がもたねエから……。



『武田家古戦二拾七図』のうち「甲州韮崎合戦之事」の図。この地域は塩川、釜無川合流地点で、岩下村にあたる。（阿礼村文庫蔵）

旨い最上の自作米を食っていた当時の村民には、「粟ボッソウ」は、特に堪えられなかったろうと父は言いもした。洪水後の村の政治は、非常にむづかしく、よく騒動が起きた。しかも、こうした歌は、実に村騒動の一步手前であると、父は諄々と説いた。「歌は世につれ世は歌につれ」は真理であり、これらの歌から、当時の中学校の修身科で教えられたような事々をも、私は心にとり入れた。

私の村には、古い歴史と共に、古歌謡がかなり残っていたらしい。
○新府城一目の あの寺平（勝頼跡のこと） 日義大徳（主計正のこと） お寺を建てて
日夜供養を なさったあげく 腹を切ったは 何チュウコッだ 武田亡びて 世は地獄

「寺平」は武田滅亡の折に、勝頼が新府城の燃えるのを眺めて泣いた峠のこと。そこへ滅亡の折に出家した小池主計正義氏が、後に寺を建て、僧として、武田家の亡魂を供養し続けた。

武田滅亡の天正一〇年（一五八二）頃を歌ったもの、この歌の最初の形態は古いと思われる。「あの寺平」が、「この寺平」ともなっている。

筆者の国文学専攻は、以上の如くに古歌謡の影響が大きい。卒論もはじめは『甲斐国山岳地帯の歌謡』の題目であった。しかし恩師藤村作博士の東大での学位論文が、『山東京伝の研究』と聞いたので、

「研究上の成功、失敗共に一目でわかり、正確な批評をいただけるだろうから……」

の意味で『山東京伝の研究』（拙著、卒業論文によるもの。昭和一〇年岩波書店出版。菊版七八三頁）に変更した。

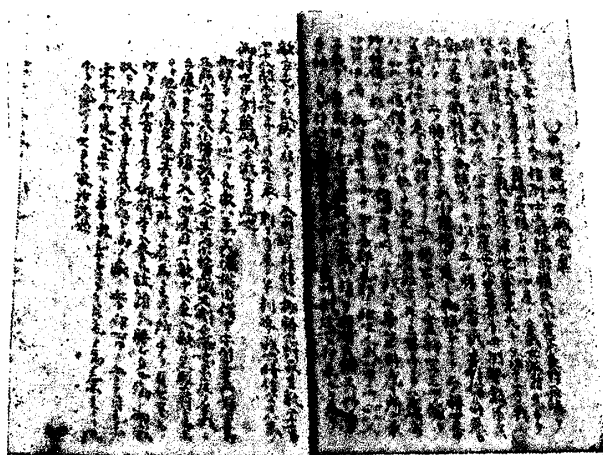
歌謡史の研究者として、当時第一人者であった高野辰之博士（東京音楽学校教授、今の上野の国立音楽大。）には、その関係で媒妁人になっていただき、上原春江と結婚した。私は生涯歌謡

からは、全く離れ難い関係にあった。

三 メロディの底に 潜む各藩の利害

歌謡史で一番区別が
つき、又捕え易いのは、
明治維新と共に現れた
「トコトンヤレ節」だ
と思う。昭和四三年
に、毎日新聞社から註

『武田家古戦二拾七図』のうち「甲州韮崎合戦之事」
の説明（阿礼村文庫蔵）



文されて、『明治夜あけの歌』（「トコトンヤレ節」の身元調べ）を書いた。

今から約一〇八年前の慶応四年四月頃には、征東大総督有栖川宮に率いられた薩摩・長州・土佐を主力とする二藩の兵隊が、江戸へ向い進軍中であつた。兵隊たちは、一斉に、「トコトンヤレ節」を歌い、幕府打倒の気魄は物凄く、文明開化の鼓笛隊のリズムと歌が調和し、兵士たちの足は軽やかであつた。

このメロディは、士氣を高揚させるに適していたので、別に、農・工・商の階級からの、庶民兵募集にも、開化の新方法として、この歌が利用された故、一般庶民の耳には慣れていた。まことに陽気な半拍子で、弱くなった幕府の力を、ゆとりのある力で押し潰す感じである。

メロディも歌の内容も、青、壮年はもとより、老年の男性の血をわかせた。明治元年の頃、文明開化を、チャリホラリと、横浜・長崎その他で眺めた日本人は、この調子が、エゲレス・フランスの新式訓練の歩調に通じ、頼もしくも感じた。幕府の力の強大だった時代には、国民は尊皇を不安な気持で仰ぎもした。ところが、この歌とそのメロディとは、一君万民の思想と倒幕とを、ひどく呑込み易い物、爽快なものとして、人々を引きつけた。つまり「トコトンヤレ節」を歌うと、武士も庶民も、盆踊り気分になったのである。

「一君万民と申さば、むつかしうござるが、『トコトンヤレ節』の調子じゃと碎いて申せば、誰人にも呑込めるではござらぬか……」
などの話も町人の間にはあつた。

農・工・商の人々も募集に応じて官兵となった。武家出の兵には、階

級的には見下げられながらも、踊る気持で江戸へ向った。死地への進軍になるかも知れないが、その恐怖を、この歌が、すっかり払いのける効果があったのだ。

大まかに「トコトンヤレ節」と言うが、正しくは『都風流トコトンヤレぶし』である。

(一) 一天万乗の みかどに手向ひ するやつを トコトンヤレ

ねらいはずさず ドンドンうち出す 薩・長・土 トコトンヤレ

(二) 宮さま宮さま お馬の前の ヒラヒラするのは 何じやいな トコトンヤレ

ありや朝敵 征伐せよとの 錦のみはたじや しらないか トコトンヤレ

(三) ふしみ・鳥羽・淀 橋本・くすはの たたかひは トコトンヤレ

薩・土・長しの おほきな手がらじや ないかいな トコトンヤレ

(四) 音に聞へし 関東さむらい どっちゃへ逃げたと 問ふたれば トコトンヤレ

城もきかいも すてて東へ にげたげな トコトンヤレ

(五) 国をとるのも 人をころすも 誰も本意じや ないけれど トコトンヤレ

わしらが所の お国へ手向ひ するゆへに トコトンヤレ

(六) 雨の降るよな 鉄砲の玉の くる中に トコトンヤレ

命もおします さきがけするの もみんなおしゅうの

ためゆへじや トコトンヤレ

の如く、歌詞が六首で、その短かさ、簡単さ、平易さなど、兵士が歩きながら歌うに適している。音数律は次の如くである。

(一) 八八五——七八五 (四) 七八八五——七七五

(二) 八七八五——七八八五 (五) 七七七五——八八五

(三) 七八五——七八五 (六) 七七五——八八七五

この歌詞の典型と見られる(二)の「宮さま宮さま」以外には、五音節・七音節・八音節の一乃至二の不足があり、日本古来からの長歌や、新体詩の整然たる音数律とはいたく異り、融通自在である。五音や八音の有無に関係なく歌える素朴さが注意される。これについては、メロディがすでにあり、それに音数をはめこみ、歌うように工風した素人作詞者が想像される。素朴な古歌謡には特にこうした類がみられ、後に述べる『逸見古歌抄』はその例でもある。

わずかに六首の歌であるが、その内容と表現には、封建的の物が消えず、各藩に割拠の証拠が色濃く残っている。

(六)に「みんなおしゅうの ためゆへじや」とあるは、「御主」即ち「藩主の為」で、封建的の物である。

(五)に「わしらが所の お国へ手向 するゆへに」は、薩・長・土を主体とする「藩」の意味である。薩・長・土の相互の藩の垣根は、なお堅固であり、倒幕に大筋が一致したというのみである。利害の複雑さが歌に浮出ている。

これを歌う兵士たちは、(五)で、「わしらが所の お国へ手向 するゆへに」を「みかどのおさめる、お国へ手向するゆへに」と歌えない所、

「明治維新の激流中」を泳ぐ人々の苦悩を、歌いつている。

『都風流トコトナレぶし』は、後年の品川弥二郎子爵が若かりし日のさかしらと、人々は疑いもするが、私には、品川弥二郎等、各藩代表数人の合作の歌詞ではないかと、内容からは思われる。即ち(内田)の「お主のため故じや」等に指摘した通りである。

「宮さま宮さま」、「錦のみはた」と歌いながらも、実は自藩の利害が中心であった事は、歌が正直に示している。しかもこれ程の難局が次第に解決され、「みかどのおさめる お国……」の事実になった事は天佑といふべきである。

四 幕兵訓練用の「トナレ歌」

歌謡としての「トナレ節」を、史料方面から検討してみると、(一)『流行トナレ節』、(二)『トナレ唄』、(三)『都風流トコトナレぶし』の三種の原本が搜し出された。

第一の『流行トナレ節』は江戸出版で、慶応元年(一八六五)以前から、江戸に流行し出した歌である。横本二冊の原本で、慶応元年出版、本の形態、体裁上からは、江戸における流行歌本の形態と認められる。それは第三の『都風流トコトナレぶし』が、瓦版であり、一枚摺りであるとは違い、本格的流行歌本形態である。

この本の表紙には、洋服姿で、鉢巻をした若い男が、左膝をつき、右膝を立て、両腕を肩の高さで前方へ突出し、踊るさまの一刹那として画かれてある。男は上唇をつき出し、目尻をさげた笑顔で、内容のトナ

レ節を歌う様である。この服装こそ、当時幕府の洋式訓練兵のそれで、つまり徳川幕府が延命策として、大金と努力を投入している訓練、それを受ける兵隊の心、そのリズムである。この調子が京都へ流れて行き、

▽トナレトナレ、鉄砲かついで、かりとれし 獵人鹿おうて、し チョチョンがよ

んやサ。

▽トナレトナレ、トントナレヤレ、トンが何のその、トトンが
よんやサ。

▽トナレトナレ、はやし 囃子に敗けずに、たぬき 狸は腹太鼓、たたいてよんや
サ。

▽トナレトナレ、富士の巻狩、し 頼朝鹿がり、け チョチョンがよんや
サ。

▽ドンタクドンタク、横浜がんきで、唐人が^{けん}拳うつ、踊ってよんやサ。
このような歌が、二冊に三四首納めてある。その中には、「フリチン、フリチン……」、「どぶろく、どぶろく……」、「か 館ころ、か 館ころ……」などの如く、「トナレ、トナレ」以外の、歌い出しの文句もあり、幕末の世相と、歌う若人の立場を反映し、卑猥な内容の物もある。しかし「トナレ、トナレ」の歌い出しが多く、これがこの歌の特色である故、『流行トナレ節』という書名がつけられ、また歌謡の名称ともなつたらしい。作者については、原本に明記してなく、幕末の流行歌謡集には、大体にこの行き方の本が多い。

「トナレ節」のはじまりについては、誰人も調べていないようであ

る。筆者は慶応元年出版の本書を、その最初の歌謡集と思っている。

五 『松平春嶽 幕末史料』 中の「紙張れ節」

徳川幕府の政治総裁で、明治の新政府初代の民部卿であり、大蔵卿兼任の松平春嶽は、越前福井三二万石の藩主、あまりにも有名な人物である。顕要な地位にある故に、多数の側近者が蒐集した資料は膨大の量らしい。そのうちの『幕末史料十七冊』を家蔵する。この貴重でかつ珍しい史料を調べつつ、幕末・明治の接点と、歌謡関係とを考えてみた。

尊王攘夷派には、脱藩者が大部分であり、貧窮の者が多かった。年齢は若く、いわゆる志士中には、博徒・無頼漢・無宿者・犯罪者などが、かなり多く混入していた。年若で、女に飢えてい、食も乏しい。こうした立場でうごき続ける若い彼等、その歌う歌謡には、低級・卑猥の極とも言わなければならない。時代は不安と矛盾混在の世相、口には尊皇を叫び、大義を説くが、その行動の実際には、安酒・売女・エロティシズムがつきまとっていた。彼等が酔って歌う「紙張れ節」はその良い例で、これが堂々と、かつ細かに『松平春嶽 幕末史料』に記してある。いかに凄く流行したかが知れる。「紙張れ節」の歌詞は極めて簡単に、居酒屋あたりで合唱したらしい。

○オメコに紙はれ、破れたらまた張れ。

○ヘノコに紙きせ、破れたらまた着せ。

このメロディは記されていない、声をあわせて、怒鳴りわめくといった合唱らしい。恐らくは文久（一八六一～六三）頃からの爆発的の流行で

『流行トンヤレ節』より少し早い。若さに狂う歌謡の、最も原始的の形態のように考えられる。後に説く山岳武士の軍歌は、天文・元亀（一五三二～一五七二）頃であり、甲斐国の山岳、国境を防備する者の軍歌である。「紙張れ節」に比較すると、紳士の歌であり、山岳の神韻をそれとなく感じ、幕末の粗雑低級さには驚く外はない。

六 トンヤレ唄その他の精密調査

「トコトンヤレ節」を更に更に追究検討してみる。前記の『流行トンヤレ節』より少し遅れて、『トンヤレ唄』という流行歌が、同様のメロディで歌われた。これは『流行トンヤレ節』の歌詞を、大流行の流れのまにまに、その倍の長さに引延した物であり、一種の替え歌とも言える。

○殿さん殿さん お馬の股で ブラブラするもナ 何じゃやら こりゃトンヤレナ（下略 八、七、八、五。——これで、一首の半分の長さである。削った部分は特に卑猥である。）

『トンヤレ唄』の残っている歌数は少く、内容は卑猥であるが、『都風流トコトンヤレぶし』の出現路線上、貴重史料である。というのは、この歌詞が『都風流トコトンヤレぶし』、特に前記語数律の（二）（六ページ下段）に酷似する点である。『都風流トコトンヤレぶし』を、誰人が作詞したかは不明だが、とにかく『流行トンヤレ節』のメロディにより、『トンヤレ唄』の歌詞を真似たことは確かである。志士の江戸・京・大阪の往来は激しく、時代・世相が躍動する流行歌は、彼等には魅力

があった。無名の作家は、征東大総督の指揮下、錦旗を高くかかげて東進する兵隊の中の誰人かであり、「一天万乗の……薩・長・土」とあるからには、三藩の者が、何人かでの合作であろうと思われる。

今も保存されている『都風流トコトシヤレぶし』の原本は、歌謡方面からは、明治維新の貴重文献である。一枚刷りの瓦版で、勿論京都での出版である。一枚刷りは傷つき易く、失われ易い。嘗て原本を高野辰之博士に見せていただいた事があるが、その折は、当時の上野の音楽学校図書館の所蔵との事であった。

一枚の紙に、戦争している絵が印刷されている。「丸に十字」の薩摩藩主の紋、「三ツ星に一文字」の長州藩主の紋、「三葉柏」の土佐藩主の紋が画かれ、右方が官軍で発砲し、左方の幕府軍の兵士に命中し、武器を捨てて逃げる様である。この絵の上部に六首の歌が(一)から(六)までの順に摺出している。左方の端に、逃げ去る幕府軍の先に「倭」の文字が、たった一字印刷してある。出版は、江戸生れの『流行トシヤレ節』より三年以上後の、明治元年出版である。それ故に江戸出版の『流行トシヤレ節』の「流行」を、特に「都風流」と意識的に書きかえたものらしい。

結局、江戸生まれの初代『流行トシヤレ節』が、まず江戸で流行した。流行は流行を産み、二代目の『トシヤレ唄』が江戸で歌われ、志士町人・武士などの往来により京、大阪でも歌われたらしい。最後に三代目の『都風流トコトシヤレぶし』が、京都で生れ、征東大総督軍の将兵間に、士気の高揚と大義名分の意味で、上司からの命令を加えた奨励に

よって歌わせられた。この士気高揚・大義名分・奨励が、実に軍歌としての要素であり、大総督麾下二十二藩兵の戦意を煽りつつ、江戸へ突入した。誠に皮肉なことであるが、江戸は「トコトシヤレ」の故郷であり、父祖の地である。歌謡の系譜をたどると、江戸城はトシヤレ節の孫に向かって、城をあげ渡し、降伏したことになる。

七 協同作詞説と和風軍歌の出現

橋本八郎の作名で、長州藩士の品川弥二郎(旧子爵。後年の内務大臣、枢密院顧問官。一九〇〇年歿。)が作詞し、作曲は祇園の芸者だとする説、また、大村益次郎(陸軍大輔。一八六九年歿。)の作曲説等もある。これらは、『流行トシヤレ節』、『トシヤレ唄』と歌詞、メロディ、出版年などを、全く知らない為に、作曲などと大袈裟に言っただけの私と思う。一体江戸生れの初代トシヤレは、その歌詞から、メロディへの想像もつく。似た歌詞で、初代・二代・三代と続くトシヤレに、初代のメロディが伝わらない筈はない。祇園の芸者の作曲説は、江戸の初代のメロディを芸者が知ってい、その弾奏による、同じトシヤレらしい。大体に、初代の歌詞を弾じたといった処と私はみる。そうした過去を知らず、祇園あたりの姉さんが、ふと三味線を伴奏に唄った事に、薩・長・土の頭株が仰天し、作曲と大きく伝えられたものらしい。品川旧子爵家へ、そうした経緯と史料とについて問合せたが、絶無との事で、作曲については、何も聞かせなかった。

一方歌謡の蒐集者・研究家をも調べてみた。関東大震災と戦火とで、文学関係の資料は大量に焼失した。しかも歌謡史料は、国文学資料中で

一番に小冊、薄っぺらな物、或は一枚物などで保存に厄介である。流行歌謡の史料などは、紙屑同様に取扱われて来もした。特に幕末歌謡資料の蒐集者は稀で、調査は容易でない。

六首の『都風流トコトシヤレぶし』の歌詞内容の矛盾にはすでにふれた。作詞者が万一にも品川弥二郎子爵だったら、こうした矛盾があるはずはない。多種多様、それぞれに利害と夢を持っていた幕末諸藩の志士の歌心が、縫り合わされて、いつの間にか『都風流トコトシヤレぶし』という一枚の瓦版になったもの、協同作詞的性格が、はっきりと認められる。それを主張出来ないのは調査不足ではなからうか。又、そうした協同作詞の周辺には、

▽振りチン 振りチン ふんどし高くッて しめずに儉約。 ぶらチン
ンヨンヤサ
(『流行トシヤレ節』)

の如き内容の流行歌が、ヒシメキ合っていて、かまびすしく歌われている。とにかく「トシヤレ節」は軍歌になり上った。『万葉集』以来、戦国時代でさえ、全く見当らなかった軍歌が、約千餘年後の慶応四年に、和風の軍歌として現われたことは、歌謡史上驚くべき事実である。

八 和風軍歌から洋風軍歌、さらに現在の軍歌へ

明治一八年に、陸軍教導団に「軍歌」の名称による『抜刀隊』が採用された。これが「軍歌」の名称の最初で、これ以前には、軍歌の名称は見当らない。但し「久米歌」や『トコトシヤレ唄』、『都風流トコトシヤレぶし』の如き内容の歌は、日本の国初からあり、私はこれを「和風軍

歌」と命名しておいた。

堀内敬三氏は『日本の軍歌』の書名で、明治以後の物について説く(昭和一九年、日本音楽雑誌社出版)。また氏は『定日本の軍歌』(昭和四年、実業之日本社出版)を出版し、佐佐木信綱博士も、自作の軍歌を、『軍歌選集』(昭和十四年、中)として刊行されている。堀内氏の『日本の軍歌』には、

日本は明治以来、幾度も強敵に向い、強敵を倒した。幾度も国運を賭して戦い、つねに国威を宣揚した。いま生きている日本人は、みな戦いの烈しい嵐に鍛えられて育って来た。軍歌はその嵐の中で、力強く叫んだ日本国民の突貫の声であった。

と冒頭にしるし、日本人が軍歌に愛着をもつこと、軍歌は国民の歌であること、敵愾心の表現であること——の三点を特筆する。更に音楽史上の形式からは唱歌であり、歌詞から見れば新体詩であるとする。

これ等の諸点は、明治になって発達した所謂「洋風軍歌」には、あてはまる。しかし、和風軍歌は、例えば、『記・紀』中の「久米歌」、『万葉集』中の防人の歌、また大伴家持の歌などは、音数律などが、ひどく違っている。さらにそれ等から年代が下り、私の発見した天文・元亀(一五三二—一五七二)頃の軍歌と見られる歌謡などは、長歌調・謡曲調・短歌調・幸若調・今様ぶりなどで、必ずしも明治の「洋風軍歌」の如くに、「歌詞の新体詩論」のみでは解決しない所が、多くある。従って「和風軍歌」を加えて考える必要がある。

一 正義を擁護し、邪惡の撃滅に一身を捧げる態度で、その結果は、
国・郷土・民族の守護・幸福となるの信念。



『絵本武蔵鑑』（北斎画、天保七年出版）甲斐国の住民に最も人気があった絵。甲斐国の人たちは天文時代から、この気魄を持ち続け、和風軍歌の保存もそのためか（阿礼村文庫蔵）

二 自己及び自己の属する軍の武力の優越と神護を確信する。歌詞とメロディにより鼓舞された士気を加えて、武力の増大を必し、更に軍事思想の普及をも行なう。

四 大体に歩調に合わせるメロディだが、必ずしも、七・五または五・七其の他の、整然たる語数律による必要はなく、日本古代の山塞守備兵の軍歌の如きは、躊躇（さんぎょ）して歌う場合もあり、馬上で悠然と吟ずるなどと、和風軍歌には、歩調と一致しない事が多い。

五 明朗爽快で、誰にも楽に歌え、それに伴う諸動作を円滑ならしめ

る。内容は、個人的の色彩に乏しい。

軍歌は実戦へ突入の前奏曲である。明治・大正・第二次大戦前等の軍隊教練の「突貫」で指導された通り、「ワァーッ」との喚声、エイ・オウの掛声以外に、闘戦乱撃場裏には、最早、歌詞はない。ただそこに至るまでに、歌った歌詞で養われた、強靱な信念の火花のみである。

明治以前の日本国軍歌は「和風調」、明治一〇年以後は「洋風調」である。その中間が、和風軍歌調に、わずかに洋風を混じたもので、この手始めが『都風流トコトシヤレぶし』であった。江戸で流行の『流行トシヤレ節』の和風に、輸入教練の鼓笛隊のリズムが加わり、文明開化の軍歌調として、当時の人々を喜ばせたものである。作曲者大村益次郎説などは、鼓笛隊の奏楽を耳にし、飛びあがって、珍しさに喜んだ民衆の、大村陸軍大輔崇拜の気持からの附会である。

洋風軍歌として特筆すべきは、『抜刀隊』（外山正一作歌、ルル作曲）である。「抜刀隊」とは、明治一〇年西南戦争で武勲を立てた警視庁部隊で、その精鋭勇敢の点で、世の推賞する所であった。外山正一は東京帝大教授、『新体詩抄』は、外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎の作をあわせて明治一五年八月、丸善書店より出版した書である。

我は官軍わが敵は 天地容れざる朝敵ぞ

敵の大將たる者は 古今無双の英雄で

これに従うつわものは 共に剽悍決死の士（『抜刀隊』の歌の『新体詩抄』所載）

はその歌詞である。

外山正一には『輕騎隊進撃の詩』（テニスン）の訳詩、

一里半なり一里半 並びて進む一里半

死地に乗入る六百騎

がある。『抜刀隊』は、陸軍教導団軍楽隊即ち、後年の陸軍戸山学校軍楽隊のお雇教師、仏人ジュール・ルルーの作曲である。明治一八年七月に、日比谷鹿鳴館で正式に発表、更に戸山ヶ原で射撃会の折に、明治天皇の御前演奏を行なった。天皇には痛くお氣に召されて、アンコールを求められた事で、人氣が湧き、その後、最も広く歌われた。従来の和風軍歌の後に整然たる姿で現れた軍歌は、この『抜刀隊』であり、特筆すべき歌謡である。

九 和風軍歌というべき物

NHKで『国盗り物語』を演じた頃、戦場で白刃をかざしつつ歌った歌、そうした歌の史料をつかんで見たい。又『風と雲と虹』とで、将門の軍隊も、啞の如くに、戦場を往来するはずはない。

武田信玄が戦闘への突入を命じた時、織田信長が軍を進めた折、将兵たちに何と叫ばせたか、何を歌わせたか、それを知らうと、必死になって搜してみた。しかし収穫は皆無である。然らば和風軍歌はなかったかという、私には手持として、天文・永祿ごろか、それ以前かと想像される、和風軍歌が僅かにある。この僅かの史料が因果の種で、私の研究への執念は、事あるごとに刺激され続けた。

もしも和風軍歌の一例の意味で、謡曲の、

……あれを見よ不思議やな、あれを見よ不思議やな、味方の軍兵の

旗の上に、千手観音の、光をはなつて虚空に飛行し、千の御手ごとに、大悲の弓には、智恵の矢をはめて、一度放せば千の矢先、雨霰とふりかかって、鬼神の上に乱れ落つれば、ことごとく矢先にかかつて鬼神は残らず討たれにけり。ありがたし、ありがたしや。

(『田村』)

……あつばれ、おのれは日本一の、剛の者と、くんでうずよとて、鞍の前輪に押しつけて、首かき切つて、捨ててけり……

(『実盛』)

右の謡曲を馬上で、一隊の大將が朗々と吟ずれば、率いる兵士を鼓舞し、和風軍歌となる。即ち、敵を鬼神に見立て、千手観音を正義を守る護国の神仏とすれば、そのまま軍歌の役に立つ。謡曲『八島』には義経の弓流しがある。「弓を惜むに非ず、名を惜しむ」の内容で、戦闘に臨むもののふの、体面、名誉を高潮する。すなわち、

「……されば此弓を、敵に取られて義経は、小兵なりといはれんは無念の次第なるべし。よしそれ故に討たれんは、力なし義経が、運の極と思ふべし……」(『八島』)

源平時代の戦闘では、魁偉の体格、絶倫の武力で、自己の勇氣を誇示し、敵を威圧し、敵の戦闘力を戦わずして低下させ、そこから戦闘に入ることが、普通の方法である。しかるに非力の見本とも言ふべき、弱い弓が、敵の手に渡することは、馬上に突つ立ち上った義経には、死よりもつらい事である。また、

「……一院の御使、源氏の大将検非違使五位の尉、源の義経……」

の名乗りに対しても、そぐはない醜態である。この心は、軍歌の基礎感情にも通ずる。

謡曲の修羅物は、確かに和風軍歌に代用出来、或は代用したらしい。さりながら、これは教養の高い首脳部だけに理解出来るものであり、一兵卒には、代用軍歌としては程度が高すぎ、且つ斉唱が出来ない難点がある。かの『幸若舞曲歌謡』中の、『十番斬』、『満仲』なども同様である。『敦盛』の有名な文句の、

「……人間五十年、げでんの内をくらぶれば、夢幻の如くなり。一度生をうけ、めっせぬ者のあるべきか……」

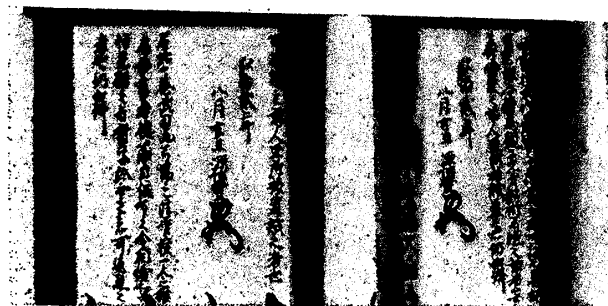
は、信長が田楽狭間へ出陣の折に、これを歌い、一さし舞ったとされている。つまり信長の「和風軍歌の代用」であるが、全軍が歌う軍歌の如き絶大な効果はない。信長は生者必滅と信じ、死の覚悟を、自己と側近の部将・重臣の如き、僅かな人々に確認させたのみである。戦闘力の主体である下級兵士は、この意味内容と、信長の覚悟とを全く知らず、ただ従軍したことになる。よしんば知ったにしても「人生無常、生者必滅」の内容では、闘志を爆発させることは出来ない。軍歌の価値と力とは、全く発揮できない。

明治以前の軍歌の研究は、『記・紀』、『万葉』や軍記物、謡曲などの僅かの資料を除けば、資料難の大氷壁に突当る。どうにもならず、筆者はもがいた。方法がなく、手持の資料だけで、決論を導くことを考えもした。この窮状は旧制の浦和高校の藤田徳太郎教授とも話し合った。一方手持の資料も、東京高等学校教授時代に副本を作りながら、原本・副

本共に戦火で失い、相談相手であった藤田君も、戦火の犠牲となった。ただしそのうちの教篇は、私自身が、酒折の宮の歌謡青年だった関係で、暗記していた。さらに資料の一部が断簡として残るといふ、不幸中の僅少の幸といった事情もあった。

一〇 日本の武士は啞だったのか

何とかして和風軍歌の実態を掴みたいの執念から、四〇年近く捜しまわった。関ヶ原の前後は、戦争が実に多いが、不思議な事には、江戸末期までに、軍歌の史料は全く残っていない。日本の武人は啞だったのか？



弘治二年武田家武道に関する古文書。「歩射之法」,
「弓場の法」など(阿礼村文庫蔵)

か？戦国時代に、或は関ヶ原の合戦に、馬はいななき、鉄砲はとどろく。しかし武士たちは、一言も発せず、黙々として槍をふるい、野太刀で敵の腕を切断し、オシトヤカに、差添を抜いて敵の首を掻切ったのか。実に不思議な事だ。私は稀書・珍書・古文書の目録を前に、思案何百回であったかしれない。事実調査だけは一過したが、誰も手をつけない研究のため、無駄骨を折った状態である。念のために、研究資料としては、あまりに有名である『閑吟集』

『隆達小唄』をも調べたが、得る所が少く、研究は進まない。遂に「日本の武士は啞だったのか」と吐息した。或は「戦場への前奏曲とも言える軍歌を、不吉と思ったかも知れない。そして歌と言え、恋愛抒情詩のように考え、長い年月の間に、軍歌史料の総てを煙滅させてしまったもの。こう考えると、何処かにその史料の断片が潜むようにも思はれてならなかった。

一 『閑吟集』と『隆達小唄』

永正一五年（一五一八）八月の漢文の序、そのあとに、和文の序があり、筆者は桑門（びと）である。その住所は、富士の遠望をたよりに庵を結んでいたとあるから、大体に想像出来る。また琴・尺八をもてあそんだ事も知られる。そして老年となり、思い出に、若い頃から口ずさんだ歌謡三百十首余を書留めた物が『閑吟集』である。惜しい事には、筆者の名がない。それと共に、切望する軍歌もない。

清見寺へ暮れて帰れば、寒潮月を吹いて袈裟にそそぐ。

と記す事から、興津の清見寺あたりに住む僧が、その筆者かと思われる。これには、

○花の錦の下紐は、解けてなかなかよしなや。柳の糸の乱れ心、いつ忘れうぞ、寝乱れ髪の面影

の如き恋愛歌謡が主で、また僧侶好みの歌が加わり、和風軍歌の片鱗さえも掴めない。軍歌は不粹で歌の部類ではないの態度である。

永正一五年は、美濃国の守護職土岐政房の長男頼純、次男頼芸、斎藤

道三（長井新九郎政利）、織田信長の父の信秀らが、抗争していた時代である。この時代に軍歌が、歌謡集に入らず、本当に無かったとしたら、日本人は木偶同然であり、そんなはずが有とは思われない。ただ歌といえ、恋愛抒情歌を主体に考えた結果らしい。根気よく捜してみようと思った。

方法がなく、歌謡史料の解説作業をやり直したら、偶然という事もあるからと、藁にすがる気持となり、見直し、調べ直して、記憶をたしかめる方法をとってみた。

隆達節の原本は、所載の歌謡の数が様々で、多数の異本のあることは、高野辰之博士の指示された如くである。

時代は豊臣秀吉、秀頼時代で、『閑吟集』より後年の物である。筆者の高三隆達は堺の人、出家して堺の願本寺（法華）に入り、暫くして天正一八年（一五九〇）に還俗し、家業の薬種商をついだ。生れつきの美声で、それ以前の歌謡をもとに、新風の小歌を歌い出したが、これが世に歓迎された。

豊臣秀頼は小唄が好きであった。隆達に命じて、慶長四年にその一卷百首を献じさせた。そこで隆達は、入念に自ら小唄を記して奉った。隆達より先に、松山新助の早歌が流行した。小瀬甫菴の『太閤記』には、新助は三好家に仕えていた者だが、三好家その他の勇士たちが、酒の席に新助を呼出して、

「……酒飲ンデ浮世忘レン。互ニ戦場ニ赴クベキ身ナリ。誠ニ無キハ数ソフ世ニ在ッテ、何ヲ期センヤ。唯隙々ヲ求メ、遊び戯レント云ツ

ッ、敵味方、堺南北ニウチ寄り、酒ナド愛シ興ズル……」

この記事から、新助は早歌を歌い興じた事が知れる。後には武士となり五千石を知行した。隆達^{りゅうだ}は新助の早歌を、豊かな天賦の才藻により、小唄^{こま}に変じ、一層時代と人の気持に合はせたものと思はれる。ボストン博物館には『隆達節譜』が所蔵。これには「慶長七年八月 自庵（花押）」の署名があり、隆達は慶長一六年（一六一一）に歿した。歌は、

○人^{ひと}とちぎらば うすくちぎりて すゑとげよ もみぢ葉を見よ こ
きは散るもの

の如き類である。『太閤記』の記事には、和風軍歌もありそうで、胸が躍ったが、事実は相違し、軍歌は見つからない。この時代には三味線はまだ一般的に行はれていず、一節切^{ひとぎり}に合はせて、右のような歌を、隆達は歌ったものである。

捜せども捜せども、和風軍歌は見つからず、吐息する外はなかった。仕方がなく、鎌倉時代の資料から、平安朝・奈良朝の方へ、再三の当の無い研究のさすらいを続けて行った。

一二 『万葉集』中で軍歌風の物

武人の家系に生れ、大伴家の家長旅人の子の家持には、『万葉集』中の詠歌に、軍歌に近い物がありそうな気がする。しかし彼は武人よりも、多感多情の創作家的政治家であった。彼のあまりにも繊細な感情は、勇猛・素朴・武力で敵を圧倒する内容の軍歌の作詞には、適しない所がある。官職は兵部少輔であり、「追^お痛^{いた}防人悲^{かな}別^{わか}之心^{こころ}」作歌一首并短

歌、「陳^{ちん}防人悲^{かな}別^{わか}之情^{なさけ}」歌一首并短歌」などで、彼の行き方は充分に知れる。後者は、

……島守^{しまもり}に わが立ちくれば 柞葉^{はは}の 母^{はは}の命^{いのち}は 御裳^{みも}の裾^{すそ} つみ
挙げ掻^あき撫^なで ちちの実^みの 父^{ちち}の命^{いのち}は 栲綱^{くづな}の 白鬚^{しらしげ}の上^{うへ}ゆ 涙垂^{なみだた}
り 嘆^{なげ}き宣^{のたま}賜^{たま}ばく 鹿兒^{かご}じもの ただ独^{ひとり}して 朝戸出^{あさとで}の かなしき
わが子……うつせみの 世^よの人なれば たまきはる 命^{いのち}も知らず
海原^{かいげん}の かしこき道を 島伝^{しまでん}ひ い漕^こぎ渡^{わた}りて あり廻^{めぐ}り わが来^き
るまでに 平^へけく 親^{おや}はいまさね 恙^{つつが}なく 妻^{つま}は待^{まち}たせと……八十
楫貫^{かきぬき}き 水手^{かことの}整^{ととの}へて 朝^あびらき わが漕^こぎ出^でぬと 家^{いへ}に告^つげこそ。

右の如く、防人に強く同情する。「大君の仕^{まじ}のまにまに」と口先では言うが、防人に召された事を悲しみ、国の守護よりも、自己・父母・妻への私情が、大君への奉仕に優先し、むしろ国防を第二次的にみている。『続日本紀、神護景雲三年十月の詔』の

東人は常にいはく、額^{ぬか}に箭^やは立つとも、背^せには立てじといひて、君を一つ心にもちて護^{まも}るものぞ。（続日本紀卷三〇、称徳天皇）

を内容とした護皇愛国の歌ではない。さりながら家持は、大伴一族に向って、歴代祖先の功業を説き、教へ諭して、

……虚言^{むなごと}も 祖^{おや}の名絶^{なつた}つな 大伴^{おほとも}の 氏^{うぢ}と名に負^{おそ}へる 大夫^{おほおと}の伴^{とも}
磯城^{しきしま}島の 大和^{やまと}の国に 明^あけき 名^なに負^{おそ}う伴^{とも}のを 心^{こころ}つとめよ
剣刀^{つるぎたち} いやよ研^とくべし 古^{いにしへ}ゆ 清^{さや}けく負^{おそ}ひて 来^きにしその名^なぞ

と歌って、この辺でようやく軍歌めいて来ている。しかし家持の、武人としての戦闘への認識は深くはなく、必死の境地、白刃を交へた戦

闘の気魄は表現出来ず、それより何段階か前の、防人らの別離に過分に同情する行き方が主となる。戦闘においての、敵兵即ち仇の殺戮による爽快味が歌えず、文学者としての繊細な気持、同情、愛他の感情に溺れるごとくである。

今春部与曾布と大舍人部千文の歌を接続してみると、軍歌というよりも、望郷の抒情詩として受取れ、人間味はひどく豊である。

今日よりは 顧みなくて 大君の 醜の御楯と 出で立つ吾は

(与曾布)

霰ふり 鹿島の神を 祈りつつ 皇御軍に われは来にしを

(千文)

即ち戦闘にはやや遠く、別離には極めて近い。有名な『戦友』(夏下飛泉作和曲)は、すでに戦闘となり、戦場での戦友との死別を歌う、軍歌としては完璧であるのに、右翼側からは、「戦死の友との死別の悲哀」、「玄海灘での国との別離」、「形見の時計だけがコチコチと動いている事」、「戦死した友と両親の悲嘆」更に「軍律を犯して戦友の介抱をした事」等を厳しく取りあげた。そして「士気消沈・軍規違反・敵愾心稀薄」の歌として、歌う事を禁止させられて、それが太平洋戦争中には実行されていた。生別・死別・友情を巧妙に裏づけた名歌詞が、歌う者の心に食入る事の強さ、それが逆に禁止の提唱となった例である。右翼側の主張の或点は認められるが、軍歌はすべてが、『橋中佐』(鍵谷徳三郎作詞)の如くである必要はないと、筆者は信ずる。

一三 『古事記』を一瞥する

『古事記』中には、『万葉集』よりも、軍歌的の歌が見つかる。中でも神武東征に伴う歌には、一例として弟宇迦斯の饗宴歌の如きは、たとえにより、軍歌的の行動と戦闘の気魄を歌う。

宇陀の、高城に、鳴鶴張る。我が待つや、鳴は障らず、勇細し、鯨障る。前妻が、魚乞はさば、立松稜の実の、長けくを、我許稗ゑね。後妻が、魚乞はさば、杓実の大けくを、幾許稗ゑね。えゝしやごしや、あゝしやごしや。

しかし、これとても本当に軍歌とは言えず、戦勝の祝賀で、過去の戦闘を思い出している歌である。ついで「尾ある土雲八十建」を討つ時には忍坂の、大室屋に、人多に、来入り居り、人多に、入り居りとも、みつゝし、久米の子が、頭椎石椎もち、撃ちてしままむ。みつゝし、久米の子等が、頭椎石椎もち、今撃たば善らし。

と歌われた。これは士卒と共に、敵を攻撃する場合で、これこそ、真の軍歌といえよう。ついで登美毘古を撃たんとした時には、

みつゝし、久米の子等が、粟生には、臭韭一茎。真根が茎、其根芽繋ぎて、撃ちてしままむ。

臭韭という感覚的の物により、敵愾心の強烈さを、「その根芽繋ぎて」の言葉で表現する。復讐心の焰は、更に吹きあがり、みつゝし、久米の子等が、垣下に、植ゑし薑、口響く、吾は忘れじ、撃ちてしままむ。

と、山椒を口にふくみ、口内が焼ける如くに、強く刺戟される感覚を、強烈な復讐心の実感としている。ついで、

神風の、伊勢の海の、大石に、はひもとほらふ、細螺の、いはひもとほり、撃ちてしまむ。

が目につく、これ等の四編は、軍歌と言える。これ等の歌の内に潜む、五瀬命を討たれた神武天皇の復讐心、敵愾心の強烈さが想像出来る。特に山椒の辛い刺戟として、「口にピリピリと、焼く如くに感ずる意味」の「口響く」の言葉は実感的で、よく表現され、純情素朴の軍歌として、誠に、資料中に輝いている。このように、近親への純情、加害者への憎悪は、後年の武士社会における「仇討の倫理」に発展する。

ついで兄師木・弟師木を撃たせられた時には、天皇の軍が、ひどく疲労した。この時に、天皇は次の歌によって軍兵に元氣をつけ、メロディによって疲労感を軽減し、兵士に希望をもたせられた。ただしこの歌を天皇が歌われ、軍兵がそれを謹聴したのではなく、軍歌の本来として、天皇も共々、声をあはせて歌い、自然と体力、氣力をふるい出し、自己をも軍兵たちをも、ひとしく鼓舞した意味である。

楯並めて、伊那佐の山の、樹の間より、い行きまもらひ、戦へば、われはや飢ぬ。島つ鳥、鶺鴒が徒、今助に來ね。

「今助に來ね」と歌った通りに、運良くも援軍に邇芸速日の命が来られた。まことに天佑であった。邇芸速日の命は、神倭伊波礼毘古の命（神武天皇）に対し、(一)天孫の降臨と聞き、後を追って高天原より降って来た事を申し、(二)天っ瑞を奉った。そして(三)神武天皇への奉仕となった。

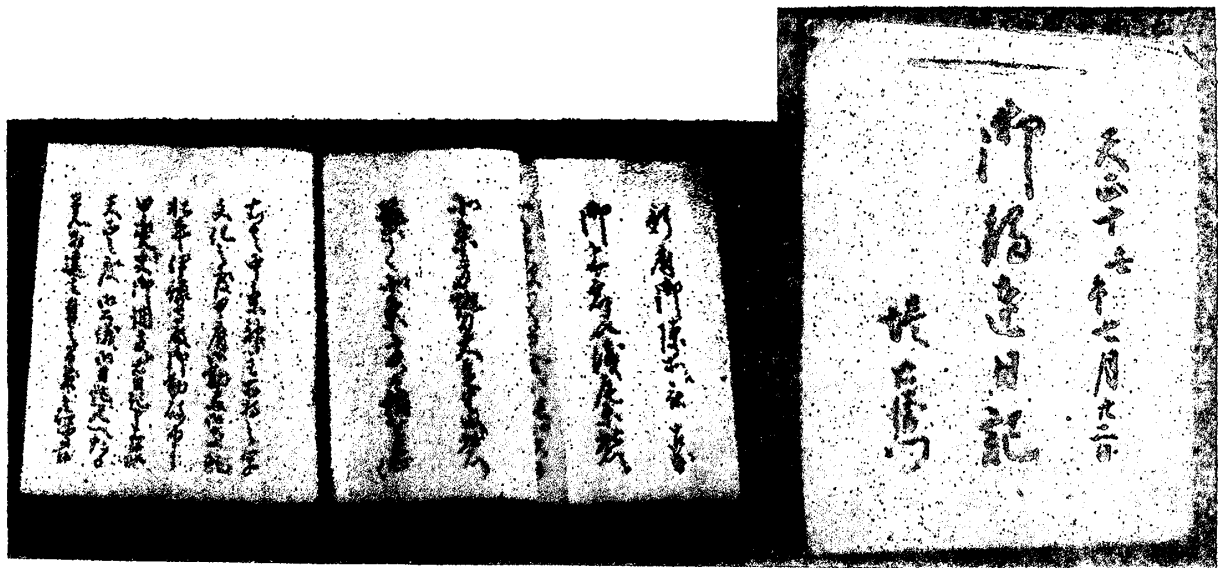
高千穂の宮から白檮原の宮に入るまでの、五瀬の命・神武天皇の、一歩一歩の道々は、戦闘の連続である。ここに必需品としての前記の軍歌が自然に生れ、その偉力と価値とを古代人に知らせた。

『古事記』に発源した純日本軍歌の、千百年の記録は失われた。しかし戦国時代に、『国盗り物語』の時代に、軍歌が無かった筈はない、慶応四年の『有栖川宮軍歌』は、和風軍歌の千年後の幻であった。こう確信して私は、和風軍歌を捜し続けた。不粹の軍歌を煙滅させた平和の力は行き届いてい、史料保存の人力の弱小さを痛感させられた。

一四 手近に軍歌史料が潜んでいた

『古事記』以後、日本に軍歌が無かったのではない。戦争は鎌倉・室町・江戸と続いて勃発している。そこには、有り過ぎる程の戦争と、大量の軍歌、軍歌資料の膨大な物が残されていた筈。史料が煙滅し、不幸にして学者の眼にふれないだけである。捜し方も悪いのであろう。平和時代に忌まれる血なまぐささ、その感情が、軍歌を暗黒の彼方へ押しやったらしい。しかし学問研究としては、等しく歌謡の貴重史料である。平和愛好による反戦の気持が、歌と言えば『閑吟集』、『隆達小唄』に記載される「恋愛歌」のみとしてしまった。これは、公平な学問的の行き方ではない。軍歌史料は何処かに必ず潜んでいる。国文学者として、一番困難なこうした研究をも、生涯の研究の一部とする事は、むしろ学究としての本懐ではなからうか。

私はこう決意した。そして、この研究の出発点に立ちもどって考えて



「逸見・武川国学集団」中の神職所伝の文書。徳川家康が、武田家滅亡の直後に甲斐国に入り、武田旧臣や神職に接した時の記録。『御觸達日記』。(阿礼村文庫蔵)。

みた。藤田蒲高教授と話し合った折の事、その折の手記を、書斎の中から捜そうと努力した。すると私が、旧制東京高校教授、第一高等学校講師時代の物が、懐かしい「四誓堂原稿紙」(東京高校で使用した作文用紙)に記されて、発見された。「天恵」と言うか、神明の加護と申したものか、胸がとどろく。忘れていた、夢に見続けていた資料だった。

八嶽の東と 西をばウンダ

守るウンダは 武田武士

びやくがくんでも 動かぬウンダ

寄せて来候へ フクペンボウが

首ひんだくりやア ぶいとう面

これがその発見の一篇である。甲斐国の八嶽に直面して立ち、その東方、即ち佐久・小諸口からと、西方の諏訪・富士見口からの侵入軍を防ぐ武田武士の軍歌であり、藤田教授と共に検討し合った資料である。「ウンダ」は甲斐の方言で「自分たち」の意味、「びやくがくむ」とは「山が崩れる」、「ふくべんぼう」は古い方言で多少不明だが「瓢箪野郎」の調子で罵る言葉らしい。「首ひんだくる」は「首を引っこ抜く」、「ぶいとう面」は、「プイと怒った顔」と解釈出来る。即ち、

八嶽の東斜面と西斜面の敵の侵入路を、自分等の部隊は守っている。我々こそは、武田武士として腕に自信がある。山岳が崩れるような、どれらい事があっても、ビクともしない我等である。この侵入路を防備する我々の武力の程を知らず、向う見ずに寄せて来るなら、来て見るが良い。瓢箪武士共の、首を引っこぬいてくれるが、

そうされたら、ムツとした腹立ち顔をして、もう遅いぞ。とにかく、八嶽の東と西は鬼門だ。夢々此処へかかって来るなよ。

自信の程は恐しい。この気魄で、山岳の峻嶒無比の隘路を睨んで控える武田武士は、これを腹の底からうなり出し、歌い出したようだ。

この軍歌を、亡父吉章は酔うと歌い、子供の頃から聞きなれていた。こうした物から更に軍歌資料を、旧蔵書の中で捜し、藤田教授と検討したのであった。但しこの方言も天文(一五三二―一五五四)時代の物ではなく、徳川時代を経て歌はれた為に、かなり近世化しているとも思われた。

とにかく目先にこんな資料があったのに、遠くを捜しあぐんでいた事は、皮肉であり、その為に、年月と労力、研究費を浪費してしまっただ。しかし徒勞とは言えず、他の問題に関する新発見が、かなりあり、いずれにしても喜ばしい結果だった。

一五 逸見・武川国学集団から「見返り塚」

八嶽から噴出した熔岩流は、次第さがりに流れて、東南に延び、七里岩高原を作る。巨大な牛の舌の如き形で、長さは四〇キロ幅は五キロもあり、周囲は絶壁で切り立ち、その先端が特に剣の先の如くに尖る。激流の削磨の斧の、絶えない力、即ち右側をば塩川が削り流れ、金峯山・茅ヶ岳などの連峰との間に塩川谿谷(逸見筋)を作り、左側は釜無川の急流が削って、甲斐駒・奥千丈などの峯々との間に、釜無川谿谷(武川筋)を刻む。この両谿谷が、七里岩の先端で合する所が、大体に武田時代の岩下郷(徳川時代の岩下村、明治時代の更科村。現在は韭崎町岩下)である。この七里岩の先端から、八嶽の方

へ約四キロもどった位置で、高原の上の小山こそ、武田勝頼の築いた新府城である。武田滅亡史上最後の二大悲劇の一は、新しく築いた新府城へ自ら火をはなった事、次は天目山の田野の、勝頼夫妻の自刃である。

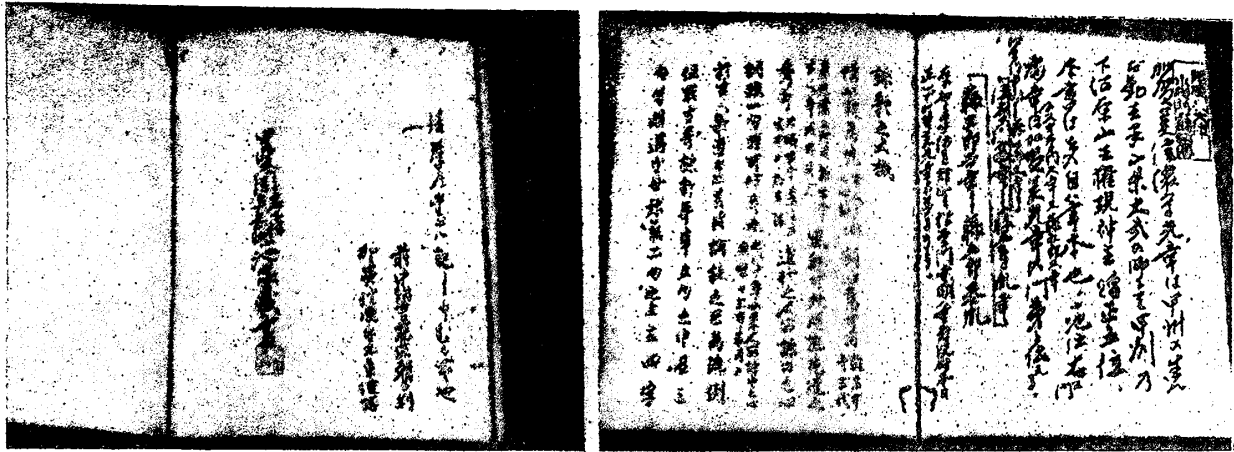
勇猛の勝頼は、智謀・戦略面では、父信玄には及ばなかった。衰運挽回の望をかけて築城した新府城に、火をかけて去る勝頼主従は、狂わんばかりであった。「逸見・武川国学集団」は、この「新府落城の懐古」といったムードに、「武田家旧臣の子孫」という、血脈による律義・交誼が加わり、自然に結ばれた集団と私はみている。

「韭崎市の名称を、「新府市」に変更することが、甲斐国の政治史・文化史の上からも、甲州人の感情面からも最も適当……」

と、長年にわたって私は主張し、韭崎市長横内要氏、その他有力者に進言した。この事は、甲斐の住民に、新府城懐古の熱情が、本能的・共同的に強烈である事を認めた結果である。

逸見・武川両筋の谷・高原・高峯の麓には、村々と古い社寺がある。

そこには武田旧臣の子孫で、織田の虐殺をまぬがれた血統が、四百年来生き続けている。その中の神主連中、村々の名主たちが、いつしか寄合、国学に興味を持つ僧侶も加わり、別に名称は付けてなかったらしいが、「逸見・武川国学集団」(筆者が便宜上仮につけた名称)とも言えるグループを作っていた。そうした結社には、徳川幕府の眼(甲府勤番支配、甲府城代、江戸の背面の軍事的・思想的の防禦)が光り、江戸時代の末には、山県大貳の勤王思想などによる事件が勃発した。表面的の結社になると疑惑を



山県大弐之師加賀美信濃守光章肉筆の『三部抄』。(阿礼村文庫蔵)

受ける憂いがあるの
で、相互に警戒しあっ
ていた。集団の経済方
面は、各村の名主で
資産家がまかなってい
た。頭が良く国学研究

に興味を持つ神主が、
学問方面の指導をな
し、学問好きの名主が、
自費で原本の翻刻・出
版などを引受け、出版
した物は、集団内に配
布した。

趣味的の物として
は、和歌・俳句・漢詩
・興(狂)歌などを集
団として作り、回覧し
合って楽しんだ。学問

好きの長百姓の連中
も加わっていた。江戸
に近い点で、大田蜀山
(南畝)・橘千蔭・石

川依平・堀秀成・加茂季鷹・橘隆興……などの学者連を招聘した。かな
りの部数の刊本や創作品、擬古文、書簡類などが、今日も残っている。
特に岩下村は、佐久口からの塩川の谷、諏訪口からの釜無川の谷の合す
る所で、逸見・武川の両谿谷は、扇を半開きにした如くに奥にひろがり、
そのカナメに当り、カナメは、近い甲府盆地へ向っての出入にもなっ
ていた。

日本の勝手明神三社の内の甲斐の勝手明神が、岩下村に鎮座し、村の
歴史の古さを語る。筆者は、浅い研究であるが、勝手の神と村の由来を
自己の文章にまとめ、巨大な碑に刻んで社殿前に建てておいた。

「天禄元年(紀元九七〇年)二位中書記本願」

と大文字で、柱に薬研彫にされた日本最古の石の鳥居が、この勝手の
社にある。事実、この鳥居の前が、元亀・天正(一五七〇—一五九〇)時代の佐久道
・諏訪道の分岐点であつたらしい。ここの宮司の腰巻因幡守正興は従五
位下、優秀な、かつ若い国学者で歌人である。正興の選ぶ日本古典、名
主伝右エ門(正興の岳父)の好む歌謡・歌舞伎・家伝の武田古史料(戦術武道書)
等が、阿礼村文庫に、多く所蔵・整理されてい、「逸見・武川国学集団」
の人々共同文庫の如くに利用され、かつ貸与された。この事は集団各自
にとって、多大の援助であつたらしい。

かの本能寺の変の直後に、急遽徳川家康が入国の時、逸見・武川両筋
の神職代表の腰巻正興の祖先の丹後守は、家康に謁して画策する所があ
り、正興家は甲斐国神職中の名家、楠正成の子孫と伝える。この「富章
・正興」を中心として、特に和歌では、「好尚・富章・正興」、「富章・

正勝・好尚・正長・正興・正辰」等が、それぞれに詠じた歌を集めた詠草が、現在も多く残っている。



「逸見・武川国学集団」の人たちの
秋斎先生撰歌（富章，正興，好尚，
正勝，正長，正辰）



「逸見・武川国学集団」中の小池富
章の詠草。月の巻。



「逸見・武川国学集団」中の富章・
正興・好尚の詠草。（いずれも阿礼
村文庫蔵）

早春霞 春來ぬと 四方に霞の たちこめて 朝日にはへる 天の

香具山 今朝ははや 霞の衣 たち初めて 春來てけりな 四方の 富章

屋の端 雪に若なを 摘まぜて 帰るは春の 花かたみ 正興

雪中若葉 降置ける 雪に若なを 摘まぜて 帰るは春の 花かたみ 好尚

かも もえ出る 雪間の若葉 たつねつゝ 摘も残さぬ 里のた 富章

をやめ ふくしもち かたまもとりて 雪のふる 吉野の若葉 摘 正興

古い武田時代から、同じ谷に住み、同じ流れの水を、母の乳房の如くに飲んで育った人々とその子孫である。全く親類関係で、重縁の者も多く、血縁続きは、逸見・武川国学集団中には多く、親近感がその特徴の第一であった。山国の常で、山岳を詠じた和歌は特に多く、

詠金峯山 爪木こる 人や暮ても かへるらん 黄金の峯の 雪のひ 富章

は、勝手明神の奥宮のある金峯山の崇高さを、神への信仰として詠じているが、逸見・武川国学集団の人々の胸に、常に疼くのは、

「新府落城の折『見返り塚』の勝頼夫人の心を」

である。「見返り塚」とは、燃える新府城を見返り見返り、泣きに泣いたが、なほ去り兼ねた高台に、人ごとの如くにあっさりと、名づけられた高地。「新府城見おさめの」意味の名である。

勝頼の奥方は北条氏政の妹で十九歳。勝頼嫡男の生母は、織田信長の養女であったが、信勝を産んで歿した。氏康の娘である北条夫人は烈女で、これ程の女性が、戦国の最悪の境遇に、生れ出たことを惜まれる程の人物であった。

武田の家運が傾いた際に、夫の勝頼が、木曾義昌を討とうとした。この時北宮地村の武田八幡に祈願した夫人の願文には、戦国女丈夫の面目が躍るが如くに現れている。次に省略して記す（武田八幡宮所蔵）。

うやまつて申
きくわん（祈願）の事

南無きみやうちやうらい八まん大ぼさつ、此国の本主として、武（竹）田の太郎と号せしより此かた、代々守り給ふ……あだを四方にしりぞけん。兵乱かへつて、めいをひらき、じゆめうしやうおん、子孫繁昌の事。右の大願成就ならば、勝頼・我ともに、社壇御垣建て、廻廊建立の事。
うやまつて申。



武田勝頼短冊（阿礼村文庫蔵）

天正十年二月十九日 源勝頼うち

この直後の三月十一日に、天目山への道の田野で、勝頼は包囲されてしまった。それまでに、何度も、

「汝は、小田原に帰って、命を全うせよ」

と諭されたが、夫人は拒絶し続けた。

黒髪の 乱れたる世ぞ 果しなき 思ひに消ゆる 露の玉の緒
源勝頼うち

を辞世とし、従容として、勝頼・信勝のかたはわらで殉じた。これに対する逸見・武川国学集団、とくに女性の同情は強烈であった事は、阿礼村文庫中の残欠の史料から、充分に察しうるところである。同情歌中の一首を、若い神官の作で示そう。



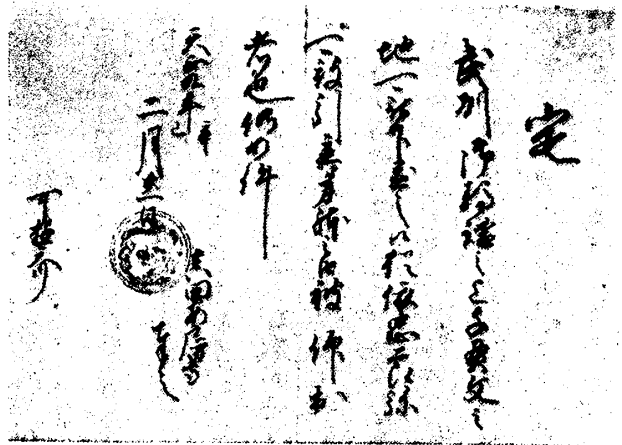
阿礼村文庫所蔵古文書。武田勝頼花押書。

駒とめて 今をか
ざりと かへりみ
し 歎ぞ塚の名
に残りける
正興

一六 甲斐国の剛風
英俗と新府城

逸見・武川国学集団
中で、同大雑誌の物
が、何種類も作られて
いたらしい。それぞれ

に特殊な性格の名がつけられていたようだが、『新府詩歌詠草』とか、『七里岩和歌集』、『奥逸見句集』などの名が多かった。襖の下張りに、大部分がなったが、筆者の書齋に、三百年の寿命を保っている物も数部



阿礼村文庫所蔵古文書。武田家滅亡の前年、真田安房守より文庫の主なる可遊斎に伝達された物。

ある。これらにも圧倒的に多いのは、新府城にはじまる一連の懐古の題である。

郭内 石黒成一

残徨遺墨緑苔繁

弔レ古雙襟涙有レ痕

興廃唯天君勿レ恨

剛風英俗至レ今存

右の石黒成一の詩

の、「剛風英俗」の四字は、新府城を中心と

した、武田旧臣の子孫の根性・気質・意地等を言い当て、捕え得ている

武田家と共に発達した甲州魂を、基礎とした土地を考へると、築城間

もなく、勝頼自身の手で火をかけ、北条夫人と共に、泣きに泣いた新府

城である。甲州人が強靱であり、細かく辛抱強く、特に経済方面に優秀

で鋭い点などは、一面からは嫌われているが、実にこの新府城を象徴と

する「剛風英俗」の血の輝きで、甲斐性・隠忍苦闘性とも言える。

さて、石丸確・金子忠告・三間義・富岡芳斎らの作品が、前記の詩に

続き、一二名の「新府懐古」の漢詩が記されている。

『自作雑詩覚』（文政十二年巳丑正月吉日、機園手控）には「新府懐古」として、

独遊ニ新府ニ不堪レ哀 況又噪踪印ニ緑苔ニ

只有ニ池辺蘋藻茂ニ

使ニ人空得レ上ニ荒台

の如きは、漢詩人として、初歩的の作品

であるが、起句の「独り新府ニ遊ビ哀ニ堪

エズ」のむせる思いは、逸見・武川の住民

の共通のものであり、この悲哀に噓ぶ心

が、「剛風英俗」に通じる。また集団を三

百年間保存させた力で、同時に天文・元

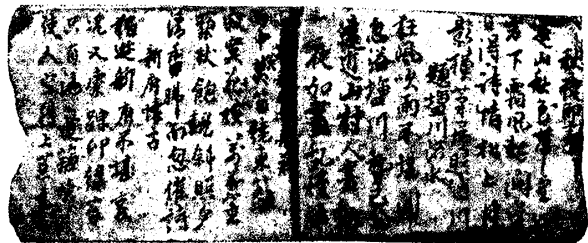
龜・天正の軍歌を明治・大正・昭和に伝え

た原動力でもあると思ふ。

高峯に囲まれた土地に住む故、山岳を詠

じた漢詩が多い。雪走る峯々は「剛風英

俗」を鍛練する如くである。



「逸見・武川国学集団」中の楓園（つきぞの）。文政十二年正月。（阿礼村文庫蔵）

鳳嶺暮雪

石原嵩山

崢嶸鳳嶺脱ニ天清ニ

積雪玲瓏画不レ成

高潔風情出ニ塵界ニ

暫時勝景一嶺明

八嶺晴風

小野秀頼

嵯峨八朶挾ニ蒼穹ニ

雲葉吹消洞口風

隱々層嵐凝水散

芙蓉峰外見ニ芙蓉ニ

釜無川については、八代年清の、

釜川釣魚

八代年清

積雪半融駒鳳嶺

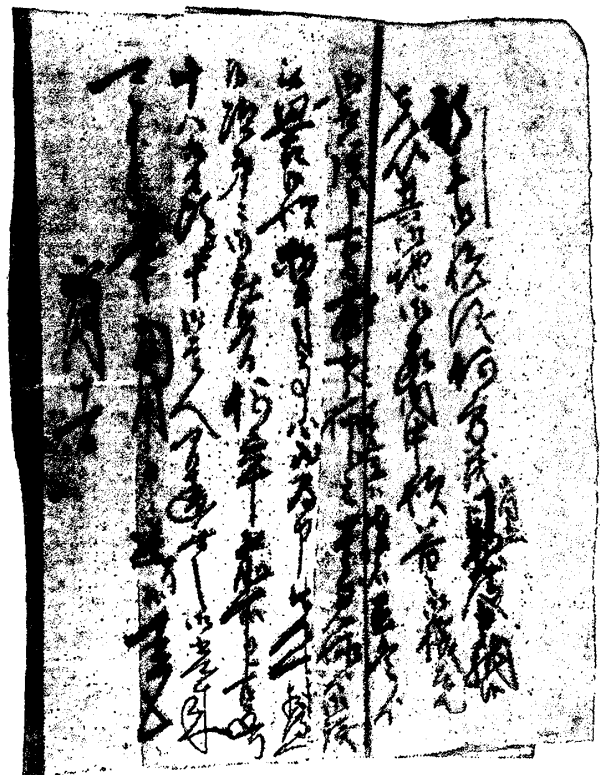
釜流南岸柳糸烟

遊魚受レ鉗知多少

屢下ニ釣竿ニ斜日遙



「逸見・武川国学集団」の神職間の文書。
(阿礼村文庫蔵)



「逸見・武川国学集団」中で取りかわした手紙。
(阿礼村文庫蔵)

「駒・鳳嶺」は、新府城からは、手の届く如き感じの、甲斐駒嶽と鳳山の白^{はくが}磴々たる偉容である。

和歌も多く詠ぜられている。

早春鶯 君が代は 千代に八千代を 音にこめて 小松引く野に

鶯のなく

(僧侶と思はれる) 釈国雄

寄花述懐 春ことに かすむ古城の 山桜 花の昔を しのびやは

する

ます子

この和歌集の五十一人程の歌の中、僧侶と明記したものは「釈国雄」、女性としての署名は「ます子」のみである。この僧侶の名は、或は、仏門に入る前の俗名か、又は武田旧臣である祖先の名乗などによって署名

しているかも知れず、ここにも一種の郷愁ムードが潜む。ます子の「古城」は、剛風英俗(甲斐は性)の核心の新府城を指す。

俳句方面では『俳諧発句新府八景』という資料がある。

西森春曙 花盛り あかつきはやし 西の森

御牧秋月 牧の田や 露みな稲に 成る月夜

釜川釣魚 箸とれば □(不明)こゝろや 柳かげ

八嶽晴嵐 一あらし すぎてあとから 春の風

富士夕照 茜^{あかね}して 日かげ残るや 秋の富士

新府懷古 神社まで 昔ぞ恋し 山さくら

の如くに続き、鶯花庵芭雪、芦雪庵輕簀から閑々坊、鞠斎に終る十二人

彦貫

文代

為春

可転

幾秋

清雄

集である。

これらは、「淡滄堂^{たんそうどう}」と柱に印刷してある特別詔の野紙に書かれてい、何部かを筆写して、集団中に回覧したものらしい。

研究資料の面では、一宮村の神職である峰城伴希真と伝右エ門富章の協力による出版物の、『唐詩選』、『枕草子』、『理慶尼の記』（武田滅亡の最後を記した物）などが手近にある。私費出版で、グループ内に分与し、他へも寄贈したとの事である。板木は阿礼村文庫に収納されていたが、明治三十一年九月の大洪水で、流失した。

岩下村を中心にして、矢崎好貫・奥石守郷・八代駒雄・小尾保教・生山正方・阪本正平・栗原信敬・越石保恭などと、村々の有力者、さらに植村・篠原・曾雌・黒倉などと、代表的の姓名が集団中にはならぶ。ただし資料の保存が甚だ悪く、蠹魚・破損・汚染による読み得ない部分が多く、残念であり、これは回覧によるためであろう。

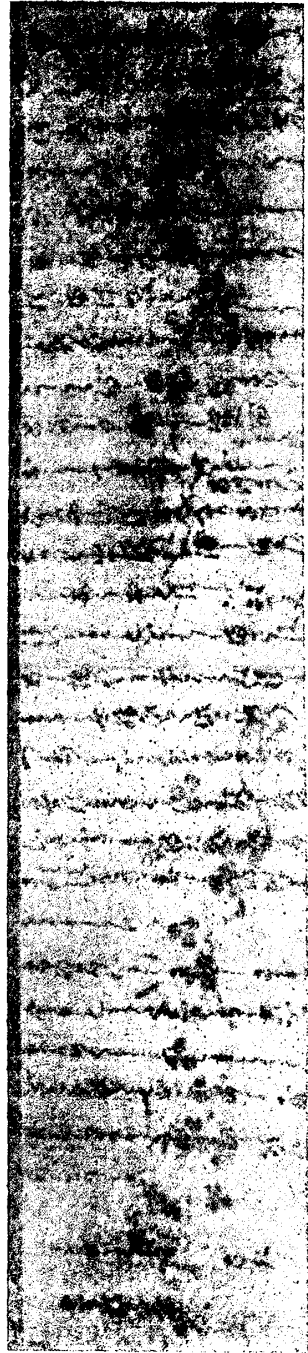
一七 逸見・武川^{へみ つかは}国学集団中の女性

塵の世に、このような清絶の土地が、よく残っていたものと思はれる程の塩川・釜無川の溪谷に、更に澄みとほる姿で、咲出る白百合が、あちこちに見える。それは溪谷・山麓・高原に住む甲斐の乙女たちである。神主の娘、名主の娘や妻などは、純潔そのものと言った、人としての白百合である。岩下村の近辺では、小池たけ、小池むめ、栗原ちよ、「波先^{なみさき}（^{（龍崎宿のこと）}河原部村を云う）」のさだ」などと、花の数は多く、その名簿は、阿礼村文庫に所蔵されていたが、失われた。栗原ちよは栗原伝左エ門の娘

で、伝右衛門富章の妻、小池たけは富章の娘で、神官腰巻正興の妻である。これらの女性は、清らかな環境の中で、『源氏物語』、『枕草子』、『古今集』、『徒然草』、『栄華物語』等を読み、『理慶尼の記』による武田の末路の悲哀に堪え、育児・家事から農事の手伝をも、ほどほどに行った。暇の折には和歌を詠じ、過去の女性の心を思い、現在の女としての、わが行く道を考えた。その詠草手紙等は、多く阿礼村文庫に所蔵されていたが、洪水で流失し、現在残る物は僅かである。しかしこの僅かの資料による検討の結果は、溪谷に咲く白百合のゆかしさ、優秀さ、文化的の高さが確実に証拠立てられる。

かの賀茂真淵の門人は三百三、四十人、その中に百名余りの女性が居た。それは大名や武士の奥方、御殿女中、神官の妻、富裕な町人の妻や娘などであった。逸見・武川国学集団中の女性は、前に触れた如くに、武田旧臣の子孫である名主・神官・農民・僧侶の妻や娘たちであって、彼女たちの団結の核心は、旧主への追慕の情即ち「剛風英俗」である。

県門の三才女と呼ばれるは油谷倭文子^{（初名いく子、八代子。姓はユヤ・ユ）}・土岐筑波子（初名茂子）・鵜殿餘野子（鵜殿孟一の妹。紀伊侯に仕えて滝川と呼ばれた。後に尼となり涼月院。兄の孟一に学んで漢詩にも巧である）等で、その他小曾根紅子^{（もみこ）}・芝崎栄子・森繁子なども傑出していた。この女性たちの文化的の行き方が、偶然ではあるが、逸見・武川国学集団中の女性にも見えている。



なみさき「さだ女」の手紙。
「岩下の里、腰巻の君に
まゐらす」。

はやうやう、怠りさま
になりて侍れば、浦
しまのうら安うおもほ
してよ。さて又、御い
とまをはしまさば、
あし垣のとり遠からぬ

一八 波先の「さだ女」と油谷倭文字

文化・文政（一八〇四—一八二九）頃には、現在の葦崎市葦崎町は「なみさき」と呼ばれた。塩川・釜無川合流によるデルタ地帯で、両川の波が立ち合
い、打ちあう意味の地名らしい。

阿礼村文庫所蔵の手紙の中に、

「いはした（岩下）の里、こしまき（腰巻）の君にまゐらす なみさ
き さだ」

の表書きで、華麗の一通がある。仮名の筆跡は実に見事で、油谷倭文字
のそれにも劣らず、立派なものである。当時の女性のならわしとして、
姓は記していないが、小池姓らしい。

ひと日とはせ給ひしをりは、さる方へまかで、御たいめ給はらず、つ
みさがたうなん。これは世のさがとゆるひ給はりてよ。いでや御世
界たひらかにおはすらんと、おしはかりたいまつりて、いとうれしう
も侍るかな。ここらにもさせるまかことも侍らぬものから、さいつこ
ろより、母とし、心地例ならずおはして、薬のわざもてあつかひ、今

程にわたらせ給ひて、此ころのつれづれをもなぐさめ給へ。させる主も
うけも侍らねど、ひたぶるに、待たいまつる。さればをくれし雁のつば
さにかけて、

宿の名の うらさびしさに 今日もまた しぐるる空を ながめく
らしつ

ともうし聞えむも、おこがましや。万はちかうさぶらひてなん。

あなかしこ

十月ついたちころ

岩下のせんしやうに まゐらす

阿礼村文庫中の、逸見・武川国学集団の人々の手紙と比較し、筆跡・
内容・用紙などいずれも、豪華至極で、これ程の手紙を書く女性が、塩
川・釜無川溪谷の入口の葦崎宿に住んでいた事には、実際驚かされた。

今日の大学で、国文学科の卒業生、大学院の修了者にも、とても、こ
れ程の擬古文は書けない。更に高い教養の方々の中には、「御たいめ」
・「ゆるひ給はり」・「たいまつりて」・「待たいまつる」を誤記かと
疑った方さえあった。これ等の女性の教養の高さを思うべきである。

これに類似の女性の手紙を、江戸文化の最高を誇る真淵門下の才媛の、倭文子・餘野子などの手紙から拾ってみよう。それ等の手紙には、真淵その他の入念な添削が加わり、「さだ女」の書翰の如く、他人の手が、全く加はらない物とは違う。『ゆきかひ』(倭文子・餘野子などの添削された手紙文)等を一覽すれば明白で、そこには、完膚なき迄とも感じられる添削がある。

あるやんごとなき処に侍る人のもとより文おこせたるにこたふ

倭文子

おく露もしづ心なう、秋かぜもわきて身にしむこゝちし侍るころを、御こともなうおはするぞうれしき。萩が花もいろめきぬれば、さもこそ広き御園生は、御心ゆくこと多かりなめ。さとはは日ぐらしのこえする夕べを独り眺めわびつゝあなるを、いかであからさまにと、まかで玉ふをりはあらじや。さとびたる物かたりも聞しなくさみ侍らばや……

この手紙の主の倭文子の交友は貴族で、特権階級の人々が主体、塩川給谷の「さだ女」とは人種的・地域的にも大きな隔りがある。

更に紀州侯の北の方である伏見宮の姫君に仕える餘野子(瀬川)が、前記の倭文子の消息に対しての返事は、次の如くである。

こたふ

餘野子

この日ごろは、夏によりたる殿の内だに、堪ふまじうて、うちとけ玉へらむわたりこそ思ひやられ侍りしが、今はまち得つる初風も、なほあふぎには、おとるべう、何れかさきになども、おもひあへ侍らぬそらよ。ひと日の御なやみ、おこたり玉ひつるこそうれしう心おちあ侍

るめれ……

これらの消息文と、「さだ女」のそれとの差は、生活程度の差を加えて、多少はあるが、驚く事は、その差の少なきである。書かれた教養的高雅さから、滲み出る文化の雫は、居住地・階級による差を除くと、寧ろ「さだ女」の方が強く輝き過ぎる如く感じる。

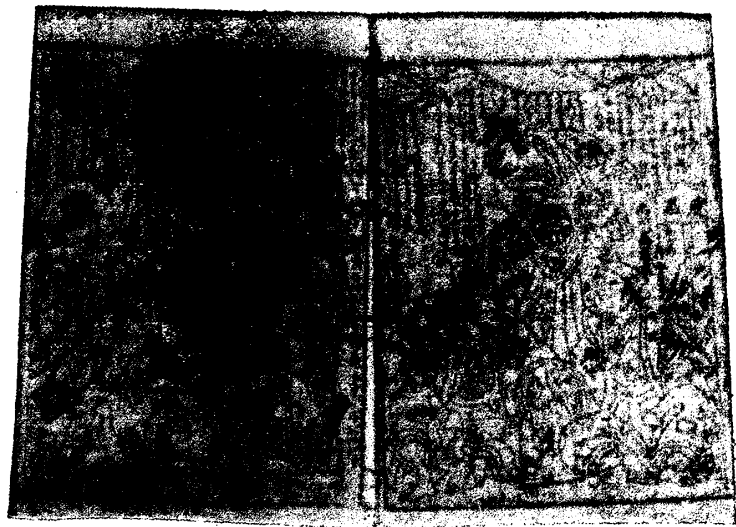
しかも県門の才媛として、筆跡が残り版本にまでなっている事を思う時、僅かに一篇の残欠を唯一の資料とする「さだ女」に同情すべ「分」^ぶが大きい。

「さだ女」の消息につき更に検討すると、その用紙は、驚く程に豪華である。淡黄色の地色、紙高の低い女性の手紙用紙で、この巻紙には、蔓草模様が、続けて横に摺出してあり、その色彩の緑色は高雅で、摺りの上からは、当時の最高級品と思はれる。

次に状袋である。表面には、藍色で薄^{うす}の葉と見られる物が、封筒一ぱいに刷出され、穂らしい部分には、時代色が自然についているが、明かで、絵師の落款も入念に刷出されている。この状袋の裏の部分には「溪子」とも読める小さな印刷文字が見えている。このような消息の料紙類は、江戸での豪商の愛嬢・内室などの使用する物であつて、塩川・釜無川両溪谷の入口に住む女性用としては、全く驚く外はない。

倭文子は、京橋弓町御用達で豪商の伊勢屋、油谷平右エ門の娘、大名の姫君や奥女中と同様の生活をしていたものらしい。別に油谷四良右衛門の名は、真淵の門人帳中の最初に記されている。

甲州は江戸との交通が繁く、甲府は第二の江戸の如くで、甲府城を



芝居絵本（明和七年の興行。同年刊行）。

『中村勘三郎座 鏡池佛曾我』芝居絵本としては古く、北尾重政春狂言画壺で珍重すべき作品。題簽二枚（赤）完全。『江戸乃花海老』の如き芝居関係の書と共に、甲斐国へは江戸土産として年々、多量に持込まれた。（阿礼村文庫蔵）



『江戸乃花海老』（天明壬寅周の春四方山人序）

「海老蔵方へ狂歌被遣詰に受取申候。例の御連中様、おもしろき御事に御座候。折節顔見せ前、取込、早々、以上。十月廿六日。成田屋七左衛門。四方御連中様」の如き、海老蔵自筆の手紙を添える。珍書。（阿礼村文庫蔵）

ば、旗本の子弟が守備する。幕府の直轄地勤番支配で江戸背後の防備地帯であった。歌舞伎芝居も江戸の興行に続くは、甲府興行である。芝居絵本は、甲州の大衆に人気があり、特に喜ばれた。この頁の挿絵の如きは、その代表で、今日まで、この清品が保存されていた。豪商・豪農、村々の名主や、群中総代などの家々には、江戸製の高級品・江戸文化の粹といった物や、風習が保存されていた。かの「神田囃子」は、甲府城勤番士（江戸旗本の二、三男が勤番士となる）により、江戸から甲府へ

持込まれ、「甲府囃子」として今日に伝わっている事なども、江戸の文化生活との関係を証明する一例である。

一九 賀茂真淵に就ての新発見

「さだ女消息文」が女性の擬古文の上乗である事に驚き、強い魅力を感じた。続いて県門の才媛を片端から注意しているうちに、その史料・菩提寺・墓石などへ、研究対象は拡大して行った。

「倭文子が墓の石にかきつけたる」（賀茂真淵の書。原文は真名）。

「倭文子をかなしめる哥」

などの、真淵の手記を検討した後、深川本誓寺塔中の常照院を訪れた。

立正の大学院学生で、倭文子研究の江口修代嬢も同伴、裏の墓地入口

の、真名の碑文（高さ約二米、幅約一米）をまず検討してみた。そこには真淵の歌の、

比登乃与爾・左幾太都古登乃 奈加理世婆 歧里乃比登播毛 千羅受

也安羅摩思

（人の世に 先だつ事の なかりせば 桐の一葉も ちらずやあら

まし）

が彫られてある。しかもこの碑には、

藤原康秘立 賀茂県主真園誌

と彫られていた。ここに重大疑問が、筆者の心中に起った。それは、賀

茂県主真園の署名である。「真園」なる人物は筆者の記憶にはない。

「まぶち」と平仮名で書いた署名は見ている。しかし「真園」には初対

面である。それでも他の学者の、検討事情はどうかと思ひ、また研究す

る価値吟味の点から、久松潜一・山岸徳平両博士に聞いて見たところ、

全く初耳である——との事だった。

頭が良く、素晴らしい容貌で、理想的に優雅な倭文子を、真淵はこよ

なく愛し、その二〇歳での死には、愛護した宝玉の碎け去った感じであ

った。従つて歿後は、折にふれて「倭文子愛」の詩文をものしていた。

「真園」の「園」の字が読めない。繰返し真名の牌文を読んでいると

「歧」・「微」・「蘇」の如き文字も眼につき、疑問が続出する。第一に真淵

研究の先輩に、この真名の碑文が故障なく読めた筈はない。第二に「真

園」の署名に蹟かない事が驚くべき手落ち、第三に「歧」その他に古文字

的の感触を掴まない油断——の結論から「園」を古文辞使用と断じ、追

究した。「微」、「蘇」は小篆「眞」は或体、「園」は「淵エン」の古

字、「眞」、古文」と判明した。詳しく記すと、真淵の浜松時代、即ち若

い頃の彼は、古文辞学者の渡辺蒙庵に師事した。真淵は、

「古道を知るには古典を、古典に通ずるには古語・古文辞を研究すべし」

の立場を堅持し、古漢字を研究した。若さの頂点での倭文子の死は、

桜の六分咲が、嵐の一過で散り果てた様と真淵は感じ、絶大な愛惜を、

この才媛・華麗・上品の淑女によせた。彼女の幻は永遠に若く、老の波

は寄せない。この確信が、若き日の古文辞研究による永遠の文字の「園」

を選び、古文字の悠久と倭文子に寄する我が心の同一を知つての署名で

ある。老年ではあるが、心の底には、恋心にも似た愛情が存在した如く

に、研究途上では、しきりに筆者は感じた。

「倭文子墓誌」以外に、この署名の物は全く見ず、論文にも接しな

い。発見は楽しく、それまでの労苦は、一瞬間で酬いられ、疲労も癒え

る。久松・山岸両博士には、発見の結果を報告した。

二〇 真淵の誓詞と集団の誓詞

逸見・武川国学集団は、暗黙のうちに、賀茂真淵系統の国学研究のシ

に真淵門下であった為であろう。「入団の烏計非言」(入団誓約書)のような物があり、それが阿礼村文庫に所蔵されていたとの事であるが、流失し、集団中の旧家に残存すれば別だが、捜しても今だに見当らない。栗原信敬その他の旧家にもあったと伝えるのみである。それは、

賀茂宇志迺教賜カモウシノヲシヘタマフ倍婆ヘイバ

皇御国迺上代乃道遠スメミクニノミカヨノミチトホ、已痛願斯奴倍里オノレイタクネズシメベリ、故、名簿平進ナツヤツアヘキリ、良世豆ヨシヨ、其道爾ソノミチニ赴比奴オモカヒ、伊摩由後イマユキ、教賜敵留言オモカヒヘタマフコト、遂爾遠里ツヒニトカリ、許流時爾之毛有受波ヨルルトキニモアラズガ、安駄志人爾アダシヒトニ私言勢自サヤノゴトセジ、且、宇志爾对比氏ウシニムカヒ、為耶無久異之伎心違思波自キヤナクアダシヤコトワオモヘジ

……(三十一)
(字省略)

に近い文面らしく、「さだ女」の手紙にある如くに、「岩下のせんしやう」と呼ぶ如き、各村の名主、官司に差出した物らしい。かの山県大貳(一七七八)などは、このような集団の雰囲気から発展した反幕府の、勤皇思想かと思われる。山県大貳の生誕地の竜王村篠原は、塩川・釜無川の合流点から約四キロ下流、大貳はその郷土、織田・徳川に亡ぼされた武田旧臣の子孫である。その師は甲府に近い村の官司加賀美信濃守光章(本論文二〇頁「三部抄」の筆者)であった。不満は国学集団中にもあったようだが、油断なく甲府城代の眼を警戒し、わずかでも表面に現さず、逆に喜んで城代の命に従う態度を集団としてとり続けた。

二二 『甲斐国志』の編纂と歌謡

松平伊予守定能は甲府勤番支配であり、幕命をうけて、文化三年(一八〇六)から『甲斐国志』編纂の事業をはじめた。武田滅亡の折に、掠

奪と戦火により、新羅三郎義光以来の古記録が、全く無に帰した様であった。しかし奇蹟的に、自害沢や腹切り林、岩窟・土の洞窟・焼失を脱れた山小屋・寺院・人家などに残存する史料もあった。

松平定能の編纂に、甲州人としては、西花輪村の内藤清右衛門、小河原村の神主の子の村松弾正左衛門、谷村の商人の森嶋弥十郎の三人が、史料に通じているという点で、この事業を助けた。幕府方は松平定能の家臣三名が、側近として働き、全百二十三巻の大著を完成した。

この大事業に、僅かに三名の甲州人だけが加わった事は、第一には幕府の発意の『甲斐国志』の編輯であり、その底流として、やゝ冷たい逆流が武田旧臣の子孫の間にあつたらしい。第二に甲斐性——甲州人独得の「剛風英俗」の意地が働き、古史料秘蔵者の中には、史料を秘密にして、編輯者に見せない者もあった。実に小池宇右エ門久胤(富章養父)もそれであつたと記す。その上に甲斐国の大衆の愛読書には、「信玄物」と称する信玄公を題材とした通俗物が多く、江戸土産の絵本類は、多く江戸草紙(赤本・黒本・竹本・黄表紙・合巻)中の信玄物で、これに反徳川の微香があつた。従つて名主役の旧家の書庫には、そうした蔵書が多い。

『甲斐国志』の編輯は、武田旧臣には、痛しかゆしの状態……といった当時の言葉が、なお僅かに伝わっている。

歴大な『甲斐国志』には、歌謡類は、殆ど採録されていない。僅かに次の二篇のみで。

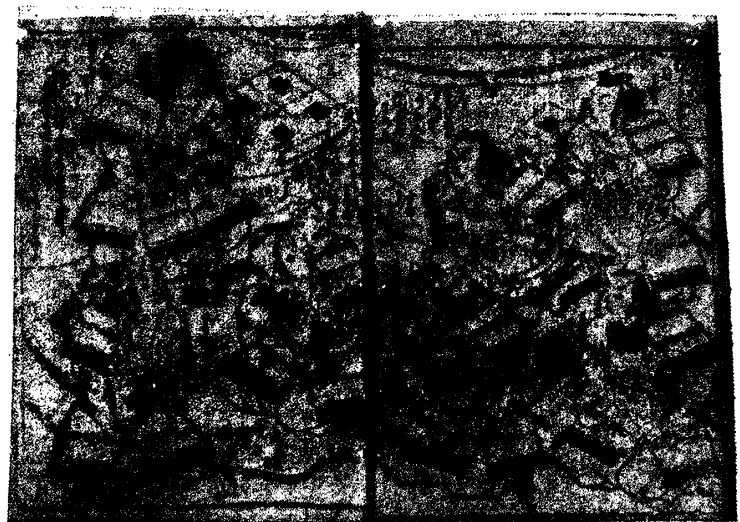
○あめ山見れば 思ひ出す わが殿は あめ山かげで討たれた。
○敵にもし せり詰られて 日の暮れば こころをゆひて 夜の明を



『武田・諏訪法正兜』（黒本、二冊、富川房信画。明和元年、奥村版）信玄愛用の法性兜が、勝頼の手にもどる図。信玄物。



『信玄一代記』（黒本、五冊、出版年不明）。自然居士が富士の裾野に宿り、夢に曾我時致が生れかわって武田信玄である由を知る図。このような類書、絵入本類をと信玄物もよぶ。



『増補甲陽軍』（黒本、三冊、西宮版、刊行年不明）。信玄は勝頼の勘当をゆるす。信玄物。（共に阿礼村文庫蔵）

まで。

右の「あの山」の歌は、生き残りの勝頼の家臣が、亡き君である勝頼の死を悲しんだとする解釈もあるが、それは誤である。これは武田の直臣の、山岳戦での討死を、生き残ったその家臣が、歎息した歌と思う。

「敵にもし」の方は、武田軍の得意の山岳戦法「此処居構築法」を、若武者に教える内容の歌である。

敵が何処までも追撃してきて、夜となった場合には、夜の暗さの中

で、バラバラの行動をしてはならない。沈着に『此処居』を急に構築して、その中に集合していて敵を防ぎ、とにかく夜明けを待って行動せよ。

「此処居」とは、山岳の樹木岩石などの地物を利用し、それ等を縄や藤づるで結び、敵がはいれないように作った柵の事で、柵を急に構築する事は、武田武士の得意の戦法で、敵の襲撃を、それで一時喰止め得るらしい。武田武士には、こうした山岳戦の心得を歌によって教えた。武

田流軍学中には、類似の歌が多い。その僅に一首だけが、『甲斐国志』の大部の中に、事々しく挿入されている点が、不思議である。史料を秘して出さなかった事実のもとより、歌謡は主家滅亡の悲歎に直結していて堪えられず、意識的に避けと見られる点が多い。山岳の間で楽天的に歌う甲州人の性格だけに、特に遠慮されたの見方もある。

○山は腰で 平地は肩で 歩むもの 歌ひ候へ 疲れ少し

別に「疲れ少く 勝つ道と知れ」とも伝えられる

右のような歌も、実戦の体験、歌の効能から来ている事は明である。

もし『甲斐国志』編纂当時於て、甲斐国山岳地帯に伝承する軍歌を蒐集し得たとしたら、武田時代そのまゝの歌詞を記録出来たら、甲斐の剛風英俗を基盤の歌が、日本歌謡が、記・紀や『万葉集』につながり、和風軍歌の宝庫とも言える歴大な史料が結集出来たであろう。同時にこれらの史料から、歴史的事実・文化・社会の万般に互り、明瞭になる部分が多かったであろう。この事は、今度の僅少な史料を把握しただけでも痛感するところ、学問的には実に惜しい事である。

記・紀や『万葉集』の和風軍歌の後に、実に一、一〇〇年余のブランク時代を抱えて、一足飛びに、慶応四年の『都風流トコトンヤレぶし』に接続しなくてはならない現在の史料事情は、あまりにも原始的でみすばらしい。文化元年は、今から一七二年も溯る。甲斐国の山で林で、変化した形であっても、和風軍歌が歌われていたろう。襖の下張りにならずに、歌謡史料が、まだ保存されていたろうにと、私はこれを惜む。

二二 『逸見古歌抄』中の素朴な歌

武田の旧臣で、主家滅亡後も、甲斐国に踏みとどまっていた者の子孫中には、二君に仕えず、名主などを勤めて、農民と共に生きていた者が多い。甲州では名主で、庄屋の名はない。亡びた者の子孫としての懐古主義から、彼等は、武田時代の古記録を特に重大視した。

天正三年（一五七五）、織田・徳川の連合軍は、三河国長篠で勝頼に勝った。七年後の天正一〇年には、信長・家康ともに、勝頼に勝ち得る自信と、心のゆとりを持ち、甲州攻を行い、金城湯地に殺倒した。名家武田の古記録を奪い、家に放火し、甲斐一国を焼け野、焼け山、焼け谷とした。武田の家臣・農民・婦女たちの集団自殺の場所——（自害沢・自害谷）・自害山・自害原・自害林……はあちこちにあったらしい。

武田信玄の男色の相手である春日源助（後年の武田の部将の高坂弾正）に、信玄が与えた「男色の誓詞」が、現在東京大学の史料編纂所に保存されている事など、滅亡の折の古文書掠奪の一大証拠であろう。従って武田史料を家に伝える旧家では、家伝の史料について他見を許さず、幕府の力をもってしても及ばず、『甲斐国志』編纂の場合には、史料絶無と言いつつ、それとなく史料提出から、逃げた者がかなりあり、その史料の一部こそ、『逸見古歌抄』の基礎となっていた部分である。

この史料は断簡・残欠で、私は昭和三年頃、藤田徳太郎君に見せた後、戦火で失われたと思っていた処、その副本の残欠を、この度発見した。これは、天明八年、逸見筋岩下村名主の宇右エ門久胤とその子伝右

衛門富章とが、家伝の古記録や逸見・武川国学集団の委託史料、その他の中から抄出したものである。所蔵場所の阿礼村文庫には、何度も浸水した事があり、水による被害とムシレが加わり、紙は綿の如くにふやけ、目もあてられない状態になっていた。

さて第一に特筆すべき歌は次の一篇で、天文・永祿（一五三二—一五六九）頃の物らしく、山の武士の粗野さ率直さと、歌好きの様を示している。はじめ数えた時の歌数は百篇以上であったが、その中に首尾完璧の物が三十篇程度であった。しかもそれが調査の度ムシレ去り、全く手のつけようのない有様である。まず胸に突き当る感じの歌は、次の数篇である。

○歌い候へ でっかくずなく びやくがくむよな ウンラの地声 寄
せる奴ばら デデーノコちぢむ 女衆土産に ヒンむしれ。

註「ずなく」強く。「びやくがくむ」山が崩れる。「ウンラ」我等。

「寄せる奴ばら」押寄せる敵兵。「デデーノコ」古方言で、良くわからぬが、男の性器。「女衆」は男衆と共に、甲州古方言である。「女房」の意味、「女たち」の意味にも用いる。

歌いなさい。大声で高い声で。山が崩れるような我等の持前の凄い声の歌を聞くと、攻め寄せる奴たちは、男の一物が縮んでしまう。そこで、家を守る女衆への土産として、敵兵のそれを、むしり取ってくれるぞ。女衆たちはさぞかし喜ぶであろう。

戦国時代の軍歌には、このような粗野でユーモラスの物が多くあるらしい。城や山寨を防禦しながら、歌い踊り、滑稽な身振りをし、天真爛漫に暮らしていたことが、『逸見古歌抄』の新発見によって知られる。し

かも他の一面として、武術の練磨・岩石・巨木などの防禦材料の蓄積、食糧の保存の苦悩があった。山菜・蛙・兎・山女・岩魚などを、手でムシリ食う生活が歌ににじんでいる。この歌声の轟きに、侵入軍は驚嘆する。音に聞く剽悍無比の武田武士のこと、男子として最大最高の宝物を、ムシリ取られてはと、自己防衛を考えたに違いなく、或は実隊にそうした行動を、何かの機会に行い、女衆への土産物にしたかもしれず、とにかく、面白い歌が見つかったものと喜びもした。既に、「一二手近に軍歌資料が潜んでいた」の処で記したが、

○八嶽の東と 西をばウンダ……

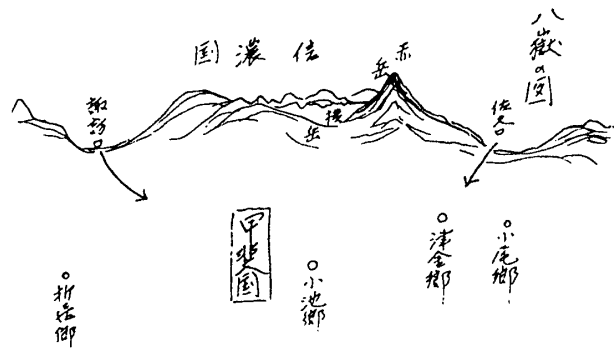
と内容的には近く、大体に同時代に歌われたものかもしれない。

二三 逸を以て勞を待つ戦法と歌

守備には、それぞれの受持の山寨（山の城）がある。八嶽の東側には佐久口、西側には諏訪口の二つの侵入路があり、これ以外にはない。

○佐久口チャ津金で 諏訪口チャおりい（「おびよ」とも読める）小
池の一堂固めた山を ねろウ奴ばら ズンズリバッチョロ 突っこ
ろがせ デンボーロ エイエイエイ オウげにや 御旗・楯無照覧あれ 御
旗・楯無照覧あれ。（御旗・楯無を略して「ミタ」ともいう）

津金・小池・小尾（或は折居か）は同族であり、それぞれの地名の土地に住み、地名を氏としていた。「ズンズリバッチョロ」、「デンボーロ」は、武田時代の古方言と思はれる。「容赦なく、谷底へ蹴落せ」の意味らしく、「御旗・楯無照覧あれ」は「ミタ照覧」とも略して歌ったらしい



が、これは誓詞である。即ち、源家伝来の神宝の「源家の白旗」と「楯無の鎧」の二者を武田家の守護神として信玄の館に祭つてあるので、武田武士は生命をかけて誓う場合には、この言葉を用いたのであった。

八嶽の南麓、赤岳から約一四キロあたりに、小池郷があり、八嶽に向つて右方に津金郷、左方の釜無川溪谷の武川筋に折居郷がある。小尾郷は塩川上流の山中の小寒村である。

は、釜無川溪谷の上の七里岩高原に出て来ていたらしく、小池・津金の如くに、郷に定着して住まなかつたようだ。しかも北方防備の部隊は、佐久口・諏訪口へ出動に便利の点で、小池郷が中必になっていた。これ等の防禦団を総称小池の一党とも呼んだ。『甲陽軍鑑』の品第二三に、

天文十一年八月、九月兩月休息有て、諸侍以下を休らるべきと有ル処に……是等の人をたとへ候へば、甲州にては、津金一党、おひ一党、小池一党、武川衆、ひがし郡にては、大村一党、辻一党……山家衆やまがしゅうなれ共、武辺は無類に、よき武士衆なり。(山家衆とは山岳の武士の意味)

とある津金・小池一党・おひ(「おりい」かもしれない)武川衆などが、佐久口・諏訪口を防備していた時代が長く、前記の歌は、その折の和風

軍歌と想像される。これ等の一党は親類関係で、しかも防備の中心的位置は小池郷(今日の高根町小池)である。險阻の山寨に陣取り、逸をもつて勞を待つと言つた山岳戦法であり、従つて歌謡も様々で、うずくまつていても歌つたものらしい。メロディは不明であるが、それとも拍子あたりか、或は謡曲調・幸若調を加味したメロディかも知れない。

○佐久口チャ持場だ 来候奴は ブラッコケ通して 押っこむチチンボー 喃心地なんち地ちよや 皆ごろし

註「ズラッコケ」富士山の大沢崩れの如くに、山の崩壊し続ける所。「押っこむチチンボー」追い込む蟻地獄——自然の崩壊場所から、巨大な蟻地獄の如き谷へ追こみ、皆ごろしにする意味。

佐久口は我々の持場である。侵入して来る奴等は、山の崩れている難路を通して疲れさせ、更に巨大な蟻地獄そっくりの谷へ追こみ、押しこむ。この戦法で氣持良くも皆殺しに出来る。

山岳武士の得意の戦法と、その自信の程を歌っている。誠に自負の程はすばらしい。更に山岳武士は歌う、

○山での合戦 山での合戦 オラン党は強エエぞ 小池の一党 小池のオラン党は 山の武士 エイエイエイエイ げにや御旗・楯無照覽あれ、御旗・楯無照覽あれ

の如く、怒号と自負である。意氣衝天とはこれであろうか。

二四 自害沢・恵林寺と悲歌

山岳戦での天下無敵を、声の限りに歌い、ここからの侵入を企てる者

こうした戦闘に直結するいまわしい甲斐国の地名には「自害^{じげえ}」を冠する。国守一家の滅亡した国には、その折の忌はし意味の地名が残される。方法が無くての集団自殺の場所の名で、武田滅亡の当時には、国内のいたる新にあったらしい。これこそ不吉な名称である為に、戦後の指導者としての新領主・武士らの意志も加わり、年と共に削られ、仏・供養・念仏・祈り・埋め……などに変化した。武田滅亡後二二四年、『甲斐国志』編輯着手の頃には、人為的に非常に少くされたらしく、それでも、

この後に、家伝や逸見・武川国学集団所蔵の史料、及び委託の古記録

より、天明八年に、宇右エ門父子が抄出した由を記す歌があるが、惜しい事には、その読み得る歌数は僅少で、史料の損傷が甚だしい。次はその中で、特筆すべき歌である。

○盆が来候ぞ 盆が来候ぞ 若武者どもよ ささげ候へ 棚たな(精霊棚)に花押かきはん 血脈けちみやく通じて 手柄も立とう (エイエイエイイイイ) げにや御旗・楯無照覧あれ 御旗・楯無照覧あれ。

この事實は、武田家所伝の花押に関する、古来からの信仰であり、又、行事でもあった。そうした物が、ここにふと混入したもの、それは本領院日義(主計正義氏)が花押謹考に関係があったためであろう。

系図の親と子とを結び続ける朱の線をば、「血脈」と甲斐国の元龜・天正頃には、呼ばれていたらしい。新しく花押を定めた若武者たちは、祖先の精霊を迎える孟蘭盆ぼらんぼんには、次のような法式によって、花押を祖先の霊に捧げた。

定紋つきの刀掛けに、花押の据えてある紙を、軸に巻いて、刀の如くに横に掛ける。それを、精霊棚の下や、仏壇の前に供えておく。浄土から来られた祖先の精霊は、捧げてある花押の真髄となってそこに入って宿る。この事によって祖先との血脈が通じ、花押と祖先と我の三者が一体となる。

この信仰が、古くから「武田流花押法式」にはあった。花押を定めながら、この事を行わないと、花押は空虚で、「ヌケガラ」に等しく力がなく、祖先は悲しみ、血脈が断える。従って、武功も立たず、その家は衰亡するとされていた。武田信虎以前からの、信仰だったと思われる。

○よく見てくだいしよ

武田の書き判

由緒正しい

源氏のながれ

新羅明神

諏訪・船形ふなかた様が

守ってくれやす

もってエねエが

子孫へ血脈けちみやく

伝えるしるし

心しづめて

ど肝きもを据すゑて

命いのちかけかけ

据すゑなされ

これは「盆が来候ぞ」より後年の物か。武田家滅亡後、甲斐国の領主が次々と変り、旧主思慕の心から花押が農民層にも広まって来た頃の、歌謡らしくも思へる。

○習ひ候へ

大字おおじで三月

続くふた月

中字ちゅうじに候ぞ

やがて品よう

定まる姿

盆ぼんに血脈けちみやく

通とほして生きて

隠密点おんみつてんには

工夫がこもる

据すゑる書き判

よろこぶ先祖

神も仏も

護まもらせ候ぞ

花押に習熟する方法、隠密点への、行き届いた注意である。

後の「歴史の謎と家康の視線」の条で記すが、本領院日義は、禍が同志に及ぶことを恐れて、自殺し果てた。その死に先立ち、花押使用の人々を戒めた歌か。或は日義の作歌かとも疑われる。

○釜無阿礼かまなし あれえは

方角むつぎやうが悪い

千年万年

ながアく住むにヤ

岩下よいとこ

塩川阿礼

峠寺移した

本領院に

花が咲きヤス

ほい（新しい芽）も出る

こうした歌謡は、恐らくは、逸見・武川国学集団の人々が、新府城・峠寺あたりから摺みとったと同じ執念的の感情によるものであろうか。

二五 柳沢吉保関係の「エグエグ節」

織田に主家は亡ぼされ、生き残った旧臣と甲斐の民は、織田信長の代官の河尻肥後守の暴政に悩んだ。河尻亡びて徳川・豊臣その他から、浅野・徳川・柳沢、更にまた徳川と領主は何度も変った。

柳沢美濃守吉保の祖先は武田の旧臣で、その食邑は、甲斐国の武川筋、駒城村の柳沢であり、食邑を姓としている。

駒嶽の麓で、釜無川溪谷から、大武川・黒沢川の削る谷を、黒戸山へ溯る途中の寒村である。

黒沢川に沿い、柳沢部落の手前の山高部落には、「神代桜」と呼ばれる樹幹一〇メートル余、日本一の白彼岸桜の巨樹が、現に繁茂（実相寺境内）している。

柳沢は大武川に沿い、山高より約二キロ上流で、柳沢吉保の祖先は、小祿の山岳武士であった。

柳沢の地名は、柳の巨樹があったためとの事であるが、桜の方は現に残っていて日本一を誇るが、柳は枯れて、その巨大さの記録も歌謡も残っていない。ましてや此処には、元亀・天正あたりの歌謡の残るものは

ない。たゞし萩生徂徠の手による文献が残されている。もし柳と桜の巨樹で、日本一の両樹が、大武川・黒沢川の清冽な溪谷に、相對して栄えていたらと、筆者は歌謡史料調査の願いと共に夢みるのである。

吉保が郡山藩主の折、五百石を与え、寵遇した徂徠は、『風流使者記』(漢詩文)に、柳沢の事を記す。その文章は徂徠の漢文に、感想。説明が加えてある。

柳沢村は林樹蔚然としてゐる。数十人の村人が、道端に俯伏し、驢呼の聲は遠近を震動させた。これは村人の、我等を出迎えの様である。

思藩主（吉保）先世諸府君皆邑居此地。而村民思恩者久矣。

の如くに、祖先が長くこの地に住み、村人に恩恵を施した意味を記し、更に、

此可下以想徳沢入民心之深也。不覺下涙。

と感傷的の言葉をも加えている。この事は、武田家における信玄の施政の根本の、

○人は城 人は石垣 人は堀 なさけは味方 仇は敵なり

の現実に、信玄が歿して一五〇年後にも、なお触れ得た感懐である。

吉保の祖先の住んだ土地は、寒村の事として、広大な居屋敷ではなくて、柳沢村の入口の左側で、黍田の中がそれであり、

方百歩。挿竹干地上以為標識。

の如くに記す。極めて狭少の屋敷で、田畑を特に重視の僻地と、低い位置の山岳武士として、これが実状である。恩顧の柳沢吉保に対し、漢学者の修飾も、現実はどうする事も出来なかったらしい。

以上の記事以外に、徂徠のこととて、漢詩をあまりにも多く記すが、古歌謡などには全く触れない立場である。ところが柳沢こそは、「エグエグ節」という特殊性をもつ歌謡の内容となつてい、刮目すべき土地である。更にこの「エグエグ節」の源流については、色々と想像されるところがある。

○サアサえぐえぐ サアサえぐえぐ

ジャガタラ芋は えぐいよ アラセ
コラセ

中でも青いのは 中でも青いのは

なおえぐい ションガ
イナ

これがその唄である。ジャガ芋を甲州では「清太夫芋」と呼ぶ。この人物は、横浜地方から、地味の悪い郡内方面へ芋を持ちこんで植えた、清太夫である。芋は瘠地でも成長し、収穫があるので喜ばれ、甲州内へ広まった。ジャガタラ芋と呼ぶのが、清太夫芋以後の名称である。一方、「えぐい」、「えぐい」と両様に発音するが「えぐい」の方が、古い言い方か。同様に「アラセ」・「アリヤセ」の両様にも、逸見・武川国学集団地域では歌われていた。

このメロディによる後記の「縁で添うとも」は圧倒的の流行で、甲州の隅々、他国までも広まった。山間僻地、柳沢の女性生活の苦悩は、甲州女性を代表し、盆踊歌として、人々の心に喰入った。ただし女性が木を切り倒し、「茅を刈る作業」は、柳沢だけの事ではない。大体に、戦国時代から徳川時代にかけて、山寄りの土地では、それが普通である。特に武田時代の居屋敷は、男衆の出陣の後を預る女衆は、男と同様の労

働に堪えたものである。

この歌で、柳沢の女性の生活は、実際以上にみじめに表現された。駒嶽に鎮座の駒嶽神社の宮司桜井義令師は、少年時代の筆者の和歌の師、令息の一郎先生は、富士川小学校での担任、また末弟勝手明神の宮司の縁辺である。少年の日に「縁で添うとも」を、一郎先生が歌われた記憶、その折に「横手（駒嶽神社のあるところ）」へも柳沢へも遊に来いよ」と言われたが、歌謡調査で行った時には、一郎先生は歿し、歌謡のみは、世の甚だしい変転をよそに人々に唄い続けられていた。

○さあさエグエグ

縁で添うとも 縁で添うとも

柳沢はいやだネー アリヤセー
コリヤセー

女ア木を切る 女ア木を切る

萱を刈る ションガイ アリヤセー
ネー コリヤセー

○盆にヤお出でよ 盆にヤお出でよ

他国にいてもネー アリヤセー
コリヤセー

死んだ仏も 死んだ仏も

盆にヤ来る ションガイ アリヤセー
ネー コリヤセー

筆者の従兄で、元公立中学校校長の滝田嵩氏は、逸見・武川溪谷の歌謡通として、又、美声の名歌手として知られ、屢々歌謡資料を提供してくれた。天明八年以後の伝右衛門の抄出断簡の中には特に、柳沢吉保名を記し、右の「女ア木を切る」の歌をのせる。

滝田嵩氏は、「現在盛んに歌われている「縁故節」として、三篇を送ってくれた。

○裏のこせ路 裏のこせ路

よく来てくれたヨー アリヤセー
コリヤセー

さぞや濡れつら さぞや濡れつら

豆の葉で ションガイ アリヤセー
ネー コリヤセー

○主は釜無 主は釜無

わしや 塩川ヨー アリヤセー
コリヤセー

末は富士川 末は富士川

深い仲 ションガイ アリヤセー
ネー コリヤセー

○縁の切れめに 縁の切れめに

この子が出来たヨー アリヤセー
コリヤセー

この子いなぼこ この子いなぼこ

縁つなぎ ションガイ アリヤセー
ネー コリヤセー

「いなぼこ」は甲州方言で「不幸な嬰兒」の意味である。

歌謡の資料は、調べれば、まだ多く現われて来そうである。

栄華をほこった『元禄太平記』の柳沢吉保自身は、栄達を先祖の余慶と信じた。そこで家系を学者に調べさせ、報恩の寄進を派手に行なった。元禄十四年十二月十八日には、河内国南河内郡通法寺の源頼義の廟前、同じく壺井権現に、花崗岩の巨大な石灯台二基宛を奉納した。これには、

従四位下前左近衛権少将兼美濃守源朝臣松平吉保。新羅三郎二十代

後裔武州川越城主。

と刻してある。又元禄十六年には、狩野常信に、自己の肖像を画かせ、自筆の讀を加え、甲斐国武川筋青木村の武隆山常光寺に納めさせた。さらに宝永二年には、自己の祖先との関係があつたとの理由で、子の柳沢保格を、代参として常光寺に詣でさせ、祖先の生国の、甲斐国を拝領した報告を行なった。

要するに、元龜・天正頃に、盛んに歌われたと想像される和風軍歌は、花押や本領院日義を歌ったような内容形態の物、特に恋愛歌に、急速に置きかえられ、その内容は『閑吟集』、『隆達小唄』にかなり接近して行った。痛烈悲痛の滅亡の悲歌も、祖先追慕や菩提を弔う盆の供養唄に変わり、人間共通の悲哀感・無常感を慰める行き方に主力が移った。

二六 甲斐性（剛風英俗）による武田武士の大復讐

ロッキイド問題でも、不明の事ばかりである。真相というものは、容易に掴まれない。ましてや永禄・天正時代の事々は、単に想像し、そう解釈する以外には手が無い場合が、あまりにも多い。特に古歌謡を調べ、言語の特性を考え、他の文芸との関係を思い、メロディをも想像するが如きは、非常に難事業で、当るよりも、はずれる方が多くはないかと、危ぶむものである。

時は戦国時代——天正一〇年には、特に大きな事件が勃発した。三月十一日に勝頼が亡び、六月二日に信長が本能寺で自殺し、それから十六日後に、織田信長の代官として、甲斐国に暴政の限りを行う河尻肥後守

が、武田殘党の一揆に、突然になぶり殺しにされた。河尻軍の大部分も、武田旧臣の手で、未曾有の大虐殺をば、高遠・小池・田野の復讐として行われた。その実情は「甲州大いに乱る」と表現され、徳川家康も急ぎ甲州へ飛込んで来た程のあわて様である。甲州は、一瞬にして織田への報復殺戮の、鮮血の大盆地と化していた。

この事につき「逸見・武川国学集團」の人々は、寺院の過去帳まがい、歿したその日だけを繰り並べて、

勝頼公には生害は三月十一日、信長が、信玄公御菩提寺恵林寺を焼きたるは四月三日、信玄公の御逝去は四月十二日、柳沢美濃守吉保の遺骸の恵林寺への改葬も四月十二日、信長の死は六月二日、明智光秀は

六月十三日……

の如くに、日だけを数えて不思議がりもしていたようだ。こうした偶然さは、別に問題とは思えない。本能寺の変が古府（甲府のこと）に伝わるには、三日は必要であつたらう。その後が日数僅かに一三日で、傷つき病み、肢体不自由で、碌な武器を持たない敗残の武田旧臣等は、立上つた。幽谷・密林・岩窟・土窟などに潜んでいた者共が、一瞬に連絡をつけ、集團となり得たのだ。当時最も完備した装備の河尻軍、戦勝に意気が火焰の如くに吹上げていた織田軍に、疾風の如き襲撃をしかけた。これは信長の田楽狭間の突入よりも激しく、妖怪集團さながらの敏速さとも想像される。河尻軍の本拠の、大泉寺小路の西方の鍛冶曲輪は、必死の武田旧臣軍に破られ、主将の肥後守は捕えられ、嘗て信玄公を火葬にした岩窪で、逆さハリツケにされた、との伝説もある。この短時間に、日本

開闢以来、最大の集團的の仇討が行われたのだ。その捨身の大復讐は、賞讃しようとしても、言葉に窮するものがある。

『元禄太平記』の、四十七士の百倍もの人と人との激突が、瞬時で終わったのである。しかも、その詳細は、史料として、全く伝わっていない。『一揆』の二字で片つけられ、又はカムフラージされている。この真相は、甲斐性の権化としての旧臣たちの、全く人力を絶した、必死の苦闘の結果でなくて、どうしてこの爽快無比の結果が得られようか。

『甲斐国志』の「河尻塚（岩窪村）」の条には、次の如くに記す。

壬午三月織田右府国ニ勝チテ諸將ヲ封ズ。河尻肥後守秀隆ニ本州ヲ賜フ。（委細國守。部ニ記ス。） 国人目撰シテ甚憎レ之。同六月信長横死スルニ及ビテ、

四方不レ期ニ蜂起シテ攻レ之。十五日終ニ於ニ此処ニ秀隆ヲ殺セリ。故山（ガタ） 県ノ同心三井弥市郎其頸ヲ得ル。従軍二千余、散々敗走シテ此処彼処ニテ討取ラルト云。墓標（河尻肥後守）モアリシガ、後、其所在ヲ失フ。中略。是時古城廃シテ、新城未レ築、河尻ハ鍛冶曲輪ト云処ニ居レリト云。大泉寺小路ノ西、鍛冶小路トアル処ナリシニヤ。

一書には、左の如く記す。

天正十一年六月十八日河尻肥後守は、武田旧臣のために包囲され、悪虐の天罰によって破れ、逃亡を企てたが、武田旧臣山県昌満の同心三井弥市郎に、円光院近くの藤川のほとりにて討取られた。

とにかく、武田信玄の居館であつた古城の右方、夢山の麓の、大泉寺・茶道越えに続く円光院のちかく、藤川畔が秀隆最後の場所らしい。故意に史料を焼失し、或は煙滅したかと疑はれるほどに、史料不足で

ある。勝者の立場から、敗者の武田側に、悪虐のかぎりを尽した怨敵河尻を討取った爽快さ、それを歌った歌謡は熱狂的で、多かつた筈であるが、その断片さえも残されていない。誠に惜しく残念なことだ。

二七 歴史の謎と家康の視線

結果からすると、脆^{もろ}すぎる敗け方であつた。織田軍中で、強力さを誇る河尻軍が、幻の如くに消え去つた。旧武田軍の敗残兵集団の一揆が、アツと言う間に、日本最強を誇る織田の中堅軍を全滅させ、その主将を討取つた事實は、甲斐をとり巻く諸豪族を啞然とさせてしまった。この隠れた主謀者は誰人か、その組織、戦闘方法など、実に意外の事ばかりだつたようだ。この事を、軍歌史料をヒントに考えてみたい。

その第一は計画遂行に要する時間の問題である。信長の死の時点から、僅かに一六日間で、復讐は完了した。もし勝頼自刃の日から数えたとしても、七〇日ほどであり、容易な事ではない。しかしこの奇跡は、完全になし遂げられたのである。第二は職業の戦闘部隊に、敗残・傷病の一揆的の集団の力では、容易に突入し得るものではない。天佑であると共に、眞実は、一揆風の遅鈍さを装つたもので、実は、生き残つた武田軍の少数精鋭の集団で、一揆的にカムフラージしたとも判断される。即ち一揆的の見かけの底には、素晴らしい頭脳と武力と、敵の弱点を見ぬく眼と精神力とがあつた。その上に重大な疑問は、主謀者らしい人物を、全く表面に出さない行き方である。この事は、不成功の場合に、禍が他へ広く波及する事を恐れてであらうか。一方一揆的色彩をつけ

た事には、河尻肥後守の軍に、「敵はたかが一揆だ。組し易し」と思はせる為、この事は知る人ぞ知るであつたろう。

一揆的の要素として、禅・法華その他の宗教関係者も加わっていたのか。恵林^{えりん}寺焼討ち、高僧連を焼き殺した法敵への怒りや、宗教的の嫌悪の情が加わつてい、河尻軍自体に、内応者もあつたものか。もしこの様な点にふれる歌謡が残つていてくれたらと、私は神仏に祈願したことが何度かであつた。

甲州大いに乱る——と知り、入国した家康は、機敏そのもので、カムフラージ的一揆と、すでに知り得たらしい。素早く先へまわつて、宥和政策をとつた。河尻肥後守軍を全滅させたい傷病武田軍を中心にして、恵林寺に武田旧臣を集め、家康公に対しては、謀反の行爲を行わない旨の、「天正壬午起請文」を出させた。それはこの一揆の実力に驚き、一刻も早く甲斐国を平和にしようとの意図で、もはや河尻肥後守軍の全滅の経緯や、陰謀の張本人などは、問題ではなかつたらしい。

旧領地が三条・浅原などと、身延・甲府方面への連終に都合の良い位置の本領院日義は、河尻襲撃の前に釜無阿礼の居屋敷に滞在する期間が長かつたと伝える。特に彼は、河尻襲撃の折には、甲府附近に潜んだらしい。後に恵林寺に参じ、生き残りの同僚と共に、主計正義氏の俗名で、慇懃に起請文を家康に奉り、その宥和政策を感謝しつつ、三条郷の釜無^{かまなし}阿礼^{あれい}の居屋敷へ、ひとまず帰り、暫くして、約四里離れた塩川^{しほがわ}阿礼^{あれい}の居屋敷に移り、それ以後は、そこに定住した。

日義が勝頼自刃後、しばしば身延・市川・浅原・三条・甲府あたりを

往来し、そのあたりに潜んだ事が、家伝として残り、法花宗の布教とも傷病の武田旧臣救護とも同志糾合とも伝え、その理由は明瞭ではない。ただし河尻軍全滅事件に重大関係のあるように、伝承されて来た。

家康とその側近者とは、常に政治的に一歩先を見る姿勢であった。彼は河尻軍を破った力を、雑然と束ねられた一揆の行動とし、別に咎める態度はとらず、一揆関係者を安心させたいらしい。しかし刃の如き視線だけは、本領院日義の周辺を離れようとはしなかった。しかし当の日義は、そうした事には全く無関心の様で、塩川阿礼で、武田家亡魂幽鬼の菩提を弔う事に専念していた。

日義は、外見は悠然たる様ではあるが、心は常に苦悩しているらしいと、下人等は憂えていたと伝える。それは第一に。主家武田の後継者の問題かと、疑う下人の声が多かった。

勝頼峠の上、寺平の峠寺に、間もなく塩川阿礼から移り、塩川の谷を間にして、新府の荒城に日々直面して暮した。旧領地の土民、旧友・他国よりの使者らしい者・法華僧・禅僧・神官などとも会い、僧侶としての日々を過していた。他国の使者らしい者などには、隠密の影もチラチラするが、その法華経三昧の態度には、手出しが出来なかった。日義は、武田浪人で二君に仕えず、農となった若者たちには、花押を作って与えたり、将来の農士即ち郷士としての心得なども語ったとかである。

ここに住む鳥は、塩川溪谷の蛙や鼠などを、たらふく食い、峠の老松の梢をねぐらにした。ねぐらの鳥が、不吉げに鳴き続ける日は暮れて、翌五月十二日となった。岩下郷の塩川阿礼から、日義大徳の俗縁の下人

たちが、塩川の断崖ツぶちの道を辿って峠寺へかけた。

天正一二年五月一二日、新府城に直面し、日義は腹かっさばいていた。袈裟・衣は、キチンと畳み、須弥壇の上に安置し、武士の姿である。

三尺七寸、「寿命」在銘の野太刀を左腕にかい込み、右

手に「備前長船住則宗」在銘の小刀を握ったまま、ことぎれていた。

主家を復興させたい願いは、神仏に常々頼り上げてある故に、必ずその事が実現するであろう——といった意味、長文の書置きが、鮮血に染んで、須弥壇近くにあったとの記録も、今は煙滅し去った。日義には、典型的の武田旧臣の姿、剛風英俗（武田武士魂ともいう）を、過去の逸見・武川の溪谷では認めていた。発見歌謡を味うほど、この間の消息が確実であるように思はれる。



本領院日義大徳墓石(中央)。天正十二年五月十二日小池主計正義氏。

二八 日義大徳の歌とそれに 続くもの

もちろん和風軍歌ではない。しかし、和風軍歌に近く、和風軍歌から導かれた歌らしい。

○新府一目の この「あの」寺平

日義大徳 お寺をたてて

日夜供養を なさったあげく

腹を切ったは 何ちユウコッタ

武田亡びて 世は地獄

「この」、「あの」の歌いわけは、

長い年月歌った上の事らしい。七音

九句、五音一句で、盆踊歌以前の物とみられる。

日義大徳の評判は、武田滅亡の直後は、大きかったが、武田の旧臣が諸侯に抱えられて甲斐国を去ると、急に薄れた。一方阿礼村屋敷内には、勝頼峠（寺平）の上から、「峠寺」を、旧家臣たちが徳川初期に、移した。武田時代の居屋敷は広大な面積で、居屋敷の主人の家と、それに接して開基の一寺院が、大体に並んで建ててあり、その周囲を、角・譜代・下人などの家々が囲んでいたのである。今日では、この寺を久住山本領院とよび、甲斐国坂の上（下條東）の法永山本照寺の隠居寺である。村人たちは「峠寺」（トウゲデラの訛）と今も呼んでいる。



○京（京都）と古府（甲府）じゃア
敵ヨウ討って

残る無念は

ごいせんケンど

いのち（「いち」意地）と魂魄

ゼシながレエて

守ってくださいシヨ

おらがため

これも新発見の歌謡であり、「新府一目の」より、後年に歌われたかと思はれる。同じ系統らしく、この歌は、日義大徳よりも宗教方面と諸行無常の大法による宗教ムードの強調にあり、最後に自己に結びつけてある。国学集団の人々が歌ったとの事である。

二九 新軍歌斉唱の明治天皇御製

和風軍歌の流れは、『古事記』から『万葉集』に至ったが、その後長い年月、全く和風軍歌は姿を消し、類似の史料もなく、『都風流トコトンヤレぶし』が、千年後の新史料として現われ出た。従って、この方面の研究は全く進まず、日本各地で史料は総て失われてしまったようだ。とにかく筆者の書齋で、十余年間不明であった残欠史料が見当たただけで、かえって不満が増大する感じである。

○いくさ歌 うたひかはして つはものも たむろのにはに 月やみ
るらむ

は明治天皇の、新軍歌齋唱を取材の御製である。「歌いかはす」が肝心なところで、黙っていては、人間には戦えない。護国の精神と、その行動とを灼熱發揮させる薪こそ、実に軍歌そのものと思はれる。これを歌えば自信が湧き、勇気が迸り、戦はずして敵を呑み、矛を交えずして敵を恐怖させ撃退する——軍歌の力はこれである。軍歌は自己に言い聞かせて信念を鍛え、他人に納得させて、同様に確信と覚悟を堅めさせる。優秀性による必勝の確信で、勿論敵側にも言い聞かせ、承認させる結果となる。

軍歌自体は、挑戦のようであるが、挑戦ではなく自信による守備である。戦闘を平和へ置きかえる、明るいメロディと思う。誰も軍歌をうたう。それは万一の場合の為であると共に、万一の場合に立至らせない為でもある。

三〇 めぐりあはせ

音楽好きの旧制高校の教授として、東京高等学校の校歌の、

○丘

菊おいしげり

風

ゆたにわたりて

あゝ 今ぞ

わが学び舎の

校歌ひびくなる

の歌から、

○吹けよ秩父の 山よりおろす

嵐、踊の 音頭とる 音頭とる ヨイ

の東高音頭を、学生と共に歌い、踊り続けた。又旧制第一高等学校講師として、「嗚呼玉杯に花うけて……」や「緑もぞ濃き柏葉の……」を歌って、学生と共に渋谷あたりをさまよいました。更に『一高寮歌集』その他による「旧制高校寮歌」の研究めいた事をも行い、校友会の各部歌にも及び、久米正雄作詞、山田耕筰作曲の、

○向ふが岡の 新草に 描きて清き白絲や

ネットにはらむ微風を 友とする身の楽しさよ

の一高庭球部歌、

○河童やめらりよか ヤリ 河童やめらりよか

エノ 河童水の アリヤイツチ 主ぢやもの エノ

(繰返し) アイツチヨナ ト

などは、思うたびに、ほのぼのとした気分にならされる。筆者は此処、東京音楽大学には、既に二十余年間勤め続けている。

和風軍歌のこの史料も、もしも筆者が、歌謡に興味が乏しく、近世文学のみを研究する立場であつたら、昭和三年頃に逸見・武川国学集団の諸資料と共に、煙滅し去っていたであらう。

絶えんとする細糸の如く、和風軍歌はかろうじて続いた。山間の国学集団中の蔵書に紛れこみ、苦難の数百年を味はいつつ、ひどい残欠の姿となり、筆者の指先に触れて日の目を見た。思えば奇縁である。

国文学の方面で、筆者は、西鶴・山東京伝・曲亭馬琴・山東京山・芝

全交・南^{なん}杣^{そう}笑^{しょう}楚^そ満^{まん}人・市場通笑・恋川春町・朋誠堂喜三二・大田蜀山・宿^{やど}屋^{やの}飯^い盛^{もり}・富川房信（吟雪）・西村重長その他について、又^{また}興^{きよう}（狂）歌や、花押、江戸草紙（赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻の総称）、絵本文学などについて、それぞれ多少の発見をも行なったが、和風軍歌のブランク時代をも、どうやら僅かに埋める事が出来た事は、秘かに喜びとする所である。今後果して、どのような史料が出現するか、学者諸先生の御援助を願う処である。

摘要

一、歌謡とその研究への魅力を、筆者自身の私事ではあるが、ありのまに、若さを回顧して記した。

二、武田時代からの伝統に生きて来た、歴史の古い村の、名主を中心とした生活を、盆踊などの歌謡を通して表現してみた。

三、「明治時代夜あけの歌」であり、『万葉集』以後千余年間の、軍歌の空白時代を経て、和風軍歌としてよみがえったのは、『都風流トコトンヤレぶし』であった。これに就いて、学者は全く顧みなかったが、この盲点を捕えた。

A『流行トンヤレ節』。B『トンヤレ唄』。C『都風流トコトンヤレぶし』の三種の原本を捜し出し、それらの検討により、新事実をまとめてみた。

四、幕末の志士や無頼漢などの事情が、良く知れるような、猥雑な歌謡資料をも調べ、その少量を発表した。

五、幕末の政治総裁で明治新政府の民部卿・大蔵卿兼任の松平春嶽が蒐集の、『幕末史料』十七冊を調べた。これらの中の歌謡の一部分を捕えて発表した。

六、やゝ精密の調査により、『トコトンヤレ唄』その他にふれてみた。七、志士や無頼漢等が、興味的に協力作詞の歌謡が、幕末・明治初年に多い事実を掴んだ。

八、順序をば、和風軍歌・洋風軍歌・現行の軍歌の如くに分けて考えてみた。

九、信玄・謙信・信長・家康らの軍隊指揮方法と、和風軍歌の関係、謡曲・幸若舞曲の利用などをも検討した。

一〇、一一、戦に明け戦争に暮れた戦国時代に、軍歌資料の文献が残されていない事を、国文学の摩訶不思議とした。『閑吟集』・『隆達小唄』等に少しくふくれてみた。

一二、一三、『万葉集』・『古事記』中の和風軍歌を一瞥した。

一四、「逸^へ見^み・武^む川^{かは}国^{こく}学^{がく}集^{しゅう}団」は、伝統の精神的集団で、武田滅亡後、自然にいつしか形づくられ、幕末に及んだ。その協同的文庫の一つの阿礼村文庫中には、和風軍歌史料の残欠が潜んでいた。これを昭和三年頃から、藤田徳太郎氏（当時歌謡専攻者）と検討して来たが、類似史料が見当たらない為に、放擲して置いた。戦災による藤田氏の死亡、筆者の罹災で、史料は十分の一に減少した。これは、自己の史料は、何時でも研究し得るものと、安易に考えた事、他人の秘蔵の史料にのみに眼を向け勝ちの、研究者の弊であった。

一五、国学集団と勝頼・北条夫人の自刃関係などにふれ、「逸見・武川国学集団」の泣き処の、新府城に及んだ。

一六、新府城関係の漢詩・和歌・俳句などから、甲斐性(剛風英俗)という強靱な特有の血脈の輝にふれ、それを説明しようと努めた。

一七～一八 国学集団中の女性に関する資料は、全く煙滅し去ったが、僅に残る超貴重史料により、真淵門下の才媛と比較してみた。

一九、発見は更に発見を導く。真淵に関する一発見を、偶然に掴んだ。

真淵の古文辞使用で、全く学界未知の事実である。

二〇、真淵門下には誓詞が行なわれた。「逸見・武川国学集団」に誓詞が有る事を前々から知っていたので、捜したが労したのみである。

二一、武田は織田・徳川の協力で亡ぼされた。又、『甲斐国志』は徳川幕府の恩恵的の編輯である。滅亡武田側への顧慮は、痛烈に響く滅亡悲歌の記録を、意識的に避けた。膨大な『甲斐国志』中に、武田滅亡悲歌謡の史料絶無に等しい理由は、この為らしい。

二二、『逸見古歌抄』は、山岳守備の武田武士の軍歌集と見られる。素朴愛すべきであり、多少の解説をも加えて置いた。

二三、軍隊成員が、軍歌を通しての自己武力への確信と、和風軍歌としての特徴を示した。これに類似の歌は、和風軍歌としての本格的なものかと思はれる。

二四、自害沢の悲惨さ無念さ、恵林寺(僧玄哲)への申訳なき、武田旧臣の嗚咽の止まらない処に、いささか触れてみた。それらの感情は次第に時の経過と共に薄れて、墓参・お盆・花押などに結合し、回顧の

情となって歌われて行った。

二五、柳沢吉保の祖先は、武田時代には小祿の山岳武士。柳沢部落は甲斐の駒嶽山麓、大武川(おおむか)の谷にある。この土地の特色をこめている「えぐえぐ節」と、荻生徂徠の、この部落を訪れた記事をも加えた。

二六、本能寺の変のあと、織田軍中の精鋭無比、河尻肥後守を総大将として甲斐国を守護する大軍が、武田残党の一揆軍により、もろくも全滅させられた。この秘策の系路を、残存する歌謡と残簡と言いいえから判断してみた。と言うのは、共に滅ぼし滅ぼされた両軍であり、一揆軍にも河尻方にも、何等の史料が残っていない。しかし、主謀者は本領院日義(日蓮宗)らしく歌謡からは想像される。この事言い伝えや、当時の事情を積み上げてみた。

二七、恵林寺に於て、徳川家康に『天正壬午起請文』を差出した後、峠寺(とうげだ)に帰り、新府城に向って、日夜亡魂の供養を続けた日義が、突然にも自殺した。しかも僧形を脱し、武田武士の姿で、野太刀をかかえて死んでいた。家康らの視線による、禍の他に及ぶ事を恐れての自殺かと、その残された言い伝え、歌謡から想像してみた。

二八、日義に関する歌は、「逸見・武川国学集団」の人々にも、秘かに歌われたらしいが、メロディは全く不明。歌数散逸。

二九～三〇 軍歌を歌う様の明治天皇の御製から、寮歌・校歌に及び、和風軍歌が千年以上全く姿を見せず、絶えるが如くにして、縷々として続いた不思議さを思う。しかもこの小論文をまとめるに、五十年の時日を要したことを衷心恥しく感じる。 完